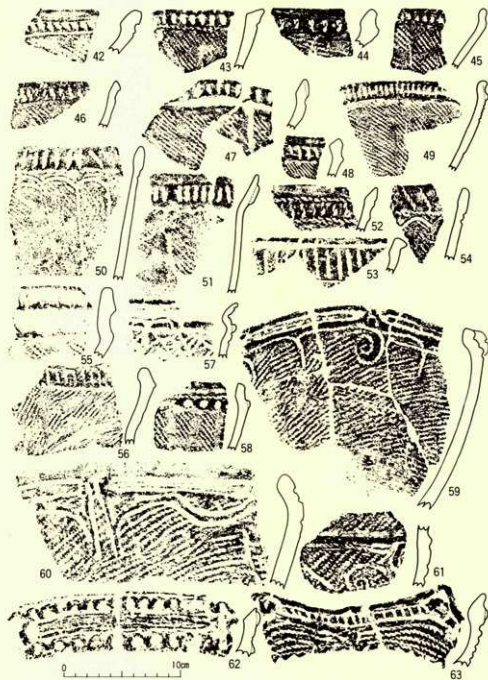


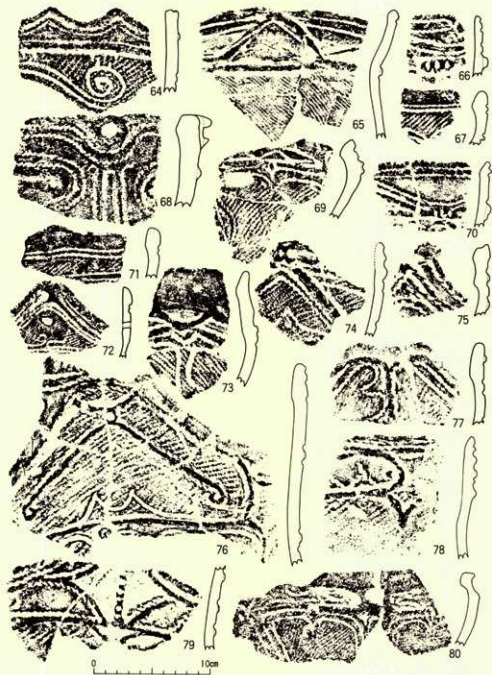
28~41 (第2群1類b)

第39図 包含地出土土器拓影図 (1/5)



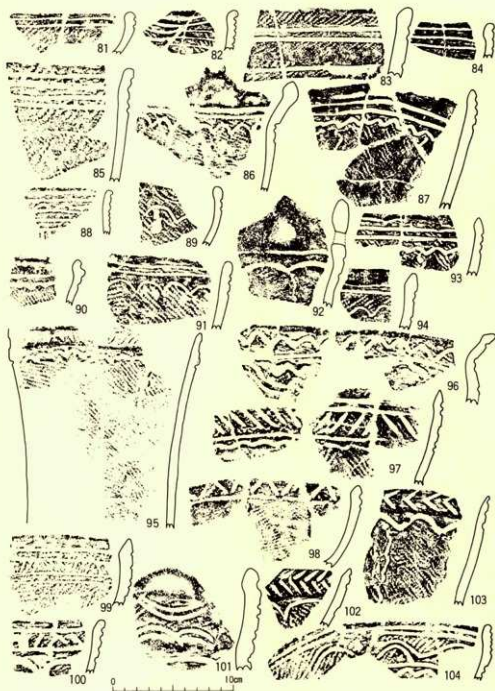
42-56 (第2群1類e) 57-63 (第2群1類d)

第40图 包含地出土土器拓影图 (1/5)



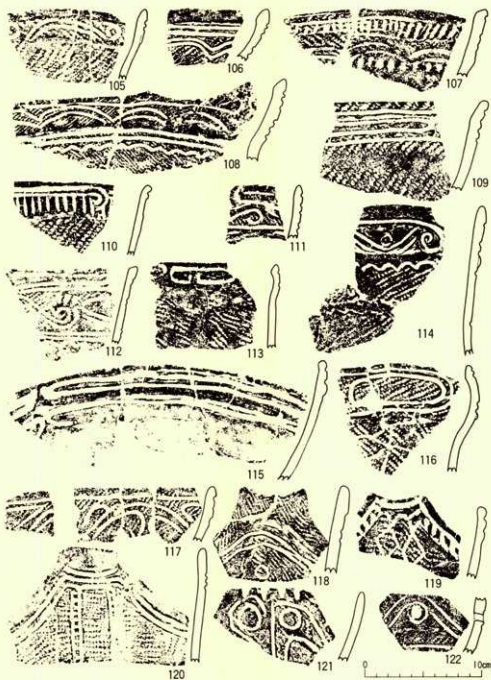
64~80 (第2群1類d)

第41圖 包含地出土土器拓影圖 (3/4)



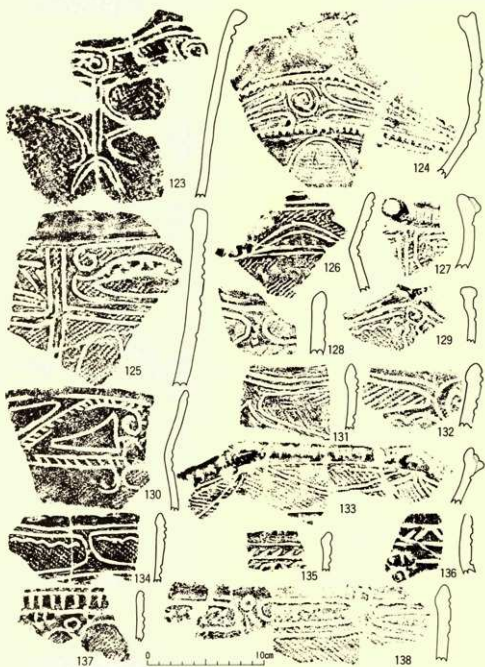
81~95 (第2群2類a) 96~104 (第2群2類b)

第42图 包含地出土土器拓影图 (ノ)



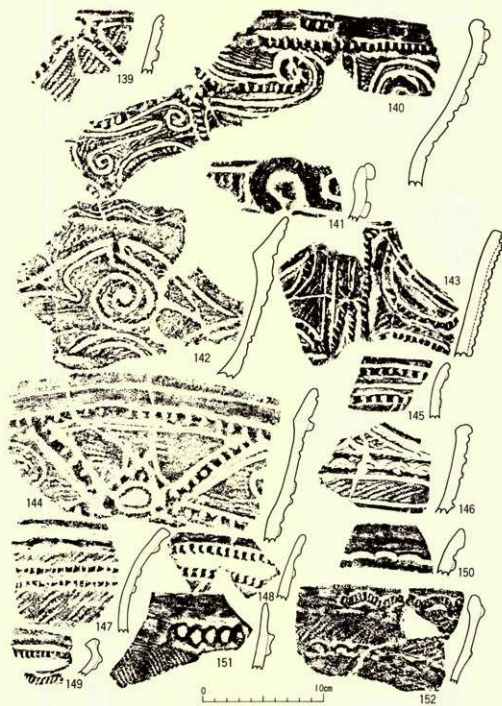
105-122 (第2群2類b)

第43圖 包含地出土土器拓影圖 (1/5)



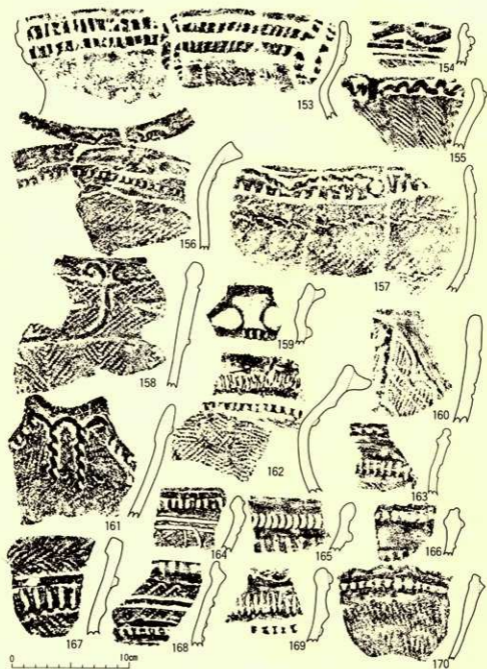
123~134 (第2群2類b) 135~138 (第2群2類c)

第44図 包含地出土土器拓影図 (1/5)



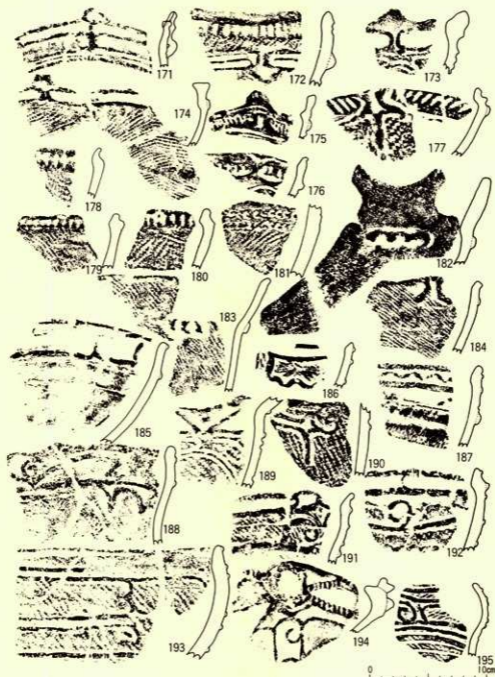
139-146 (第2群2類d) 147-152(第2群3類a)

第45圖 包含地出土土器拓影圖 (1/5)



153-156 (第2群3類a) 157-170 (第2群3類b)

第46圖 包含地出土土器拓影圖 (片)



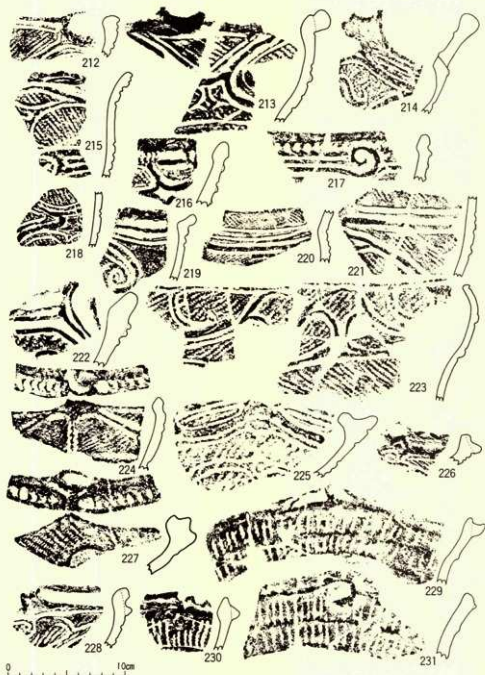
171~177 (第2群3類c) 178~184 (第2群4類) 185~195 (第3群1類)

第47圖 包含地出土土器拓影圖(片)



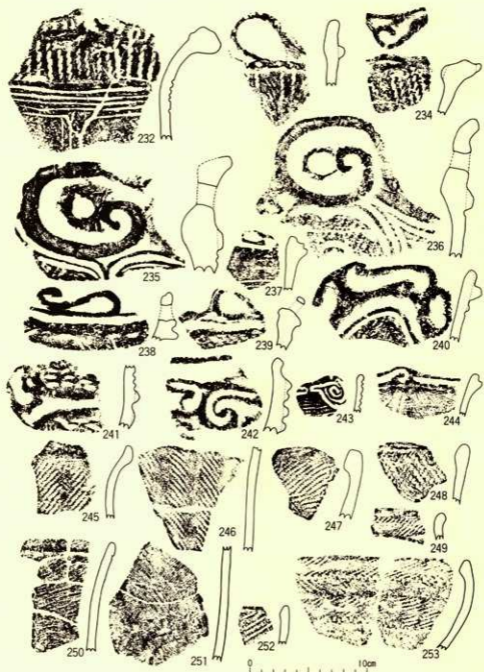
196~202 (第3群1類) 203~205 (第3群2類) 206~211 (第3群3類)

第48図 包含地出土土器拓影図 (1/5)



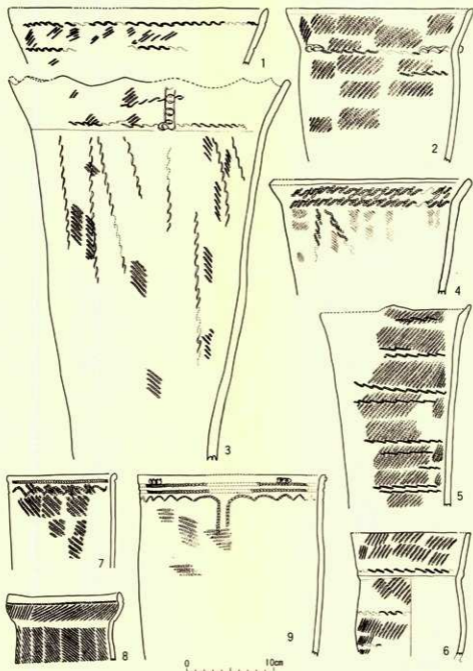
212-223 (第3群3類) 224-228 (第3群4類) 229-231 (第3群5類)

第49圖 包含地出土土器拓影圖 (1/5)



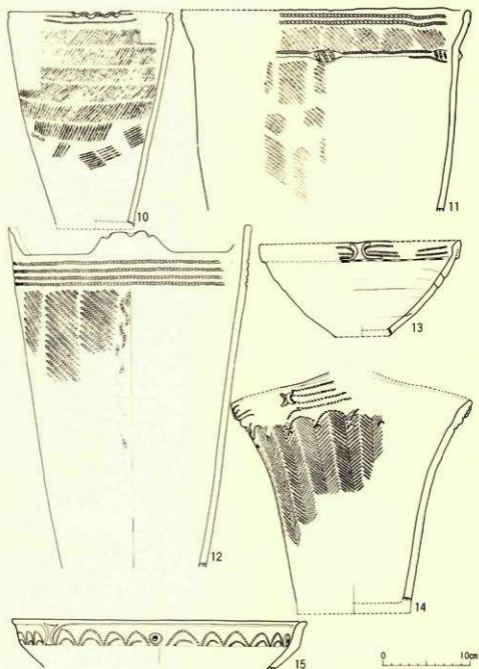
232-234 (第3群5類) 235-240 (第3群6類) 241-244 (第4群) 245-253 (第5群)

第50図 包含地出土土器拓影図 (1/5)



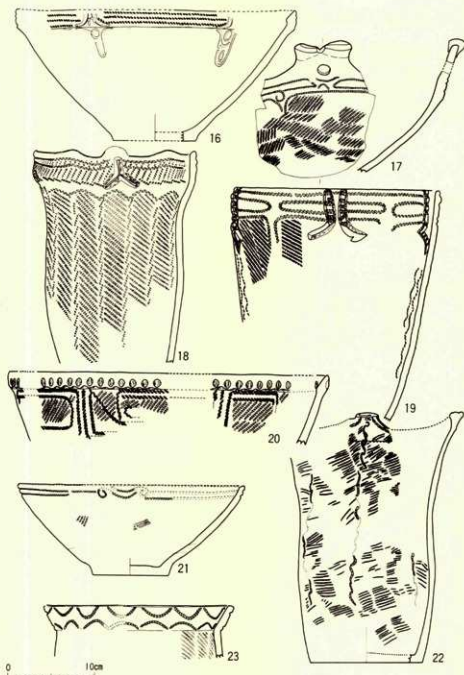
1~6 (第1群3類) 7~9 (第2群1類a)

第51圖 包含地出土土器実測圖 (1/4)



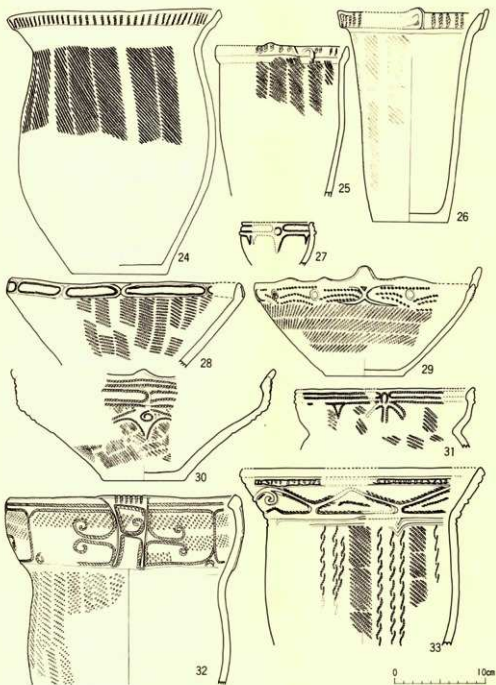
10~14 (第2群1類a) 15 (第2群1類b)

第52図 包含地出土土器実測図 (1/4)



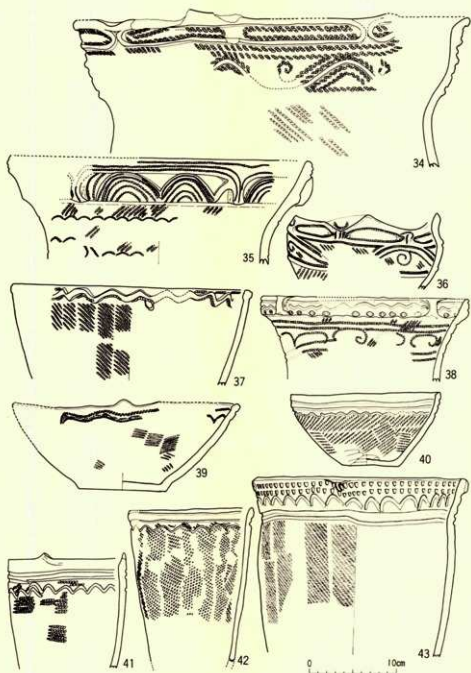
16 (第2群1類a) 17~22 (第2群1類b)

第53図 包含地出土土器実測図 (1/4)



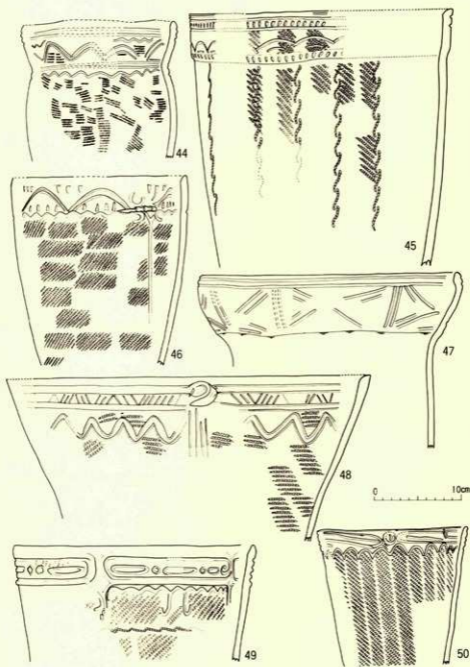
24~26 (第2群1類c) 27~33 (第2群1類d)

第54図 包含地出土土器実測図 (34)



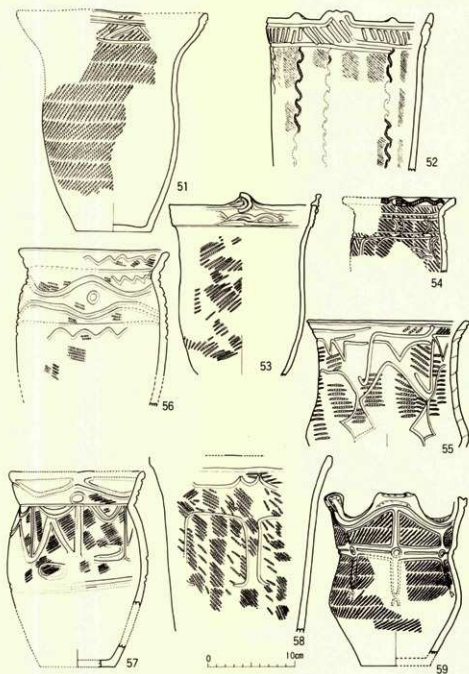
34-39 (第2群1類d) 40-43 (第2群2類a)

第55図 包含地出土土器実測図 (34)



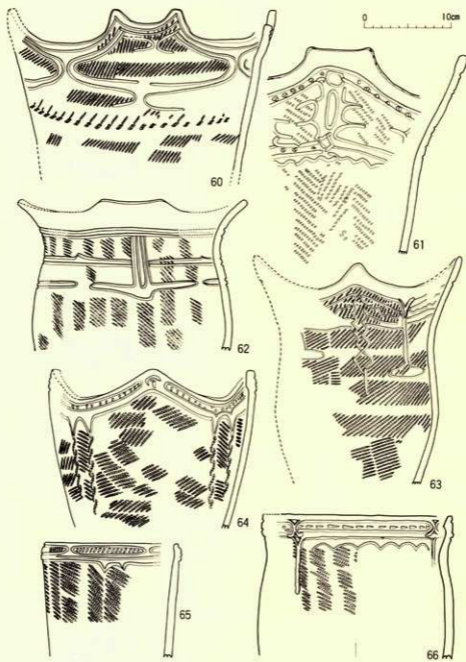
44-50 (第2群2類b)

第56図 包含地出土土器実測図 (1/4)



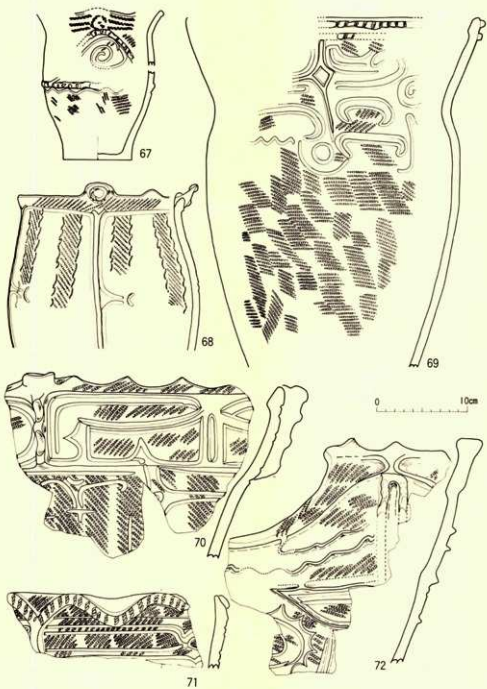
51-59 (第2群2類b)

第57図 包含地出土土器実測図 (1/4)



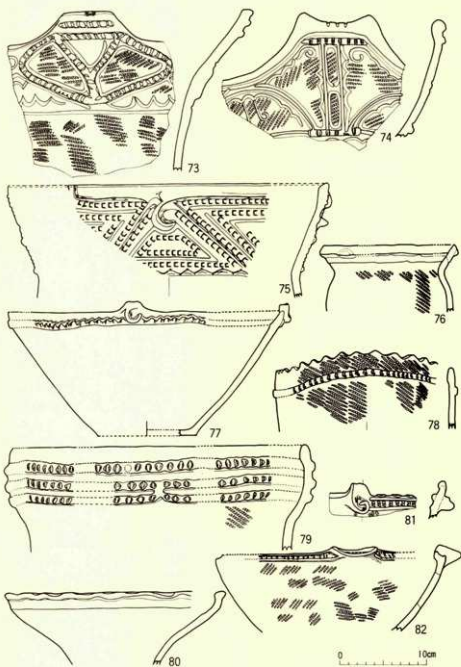
60~63 (第2群2類b) 64~66 (第2群2類c)

第58図 包含地出土土器実測図 (34)



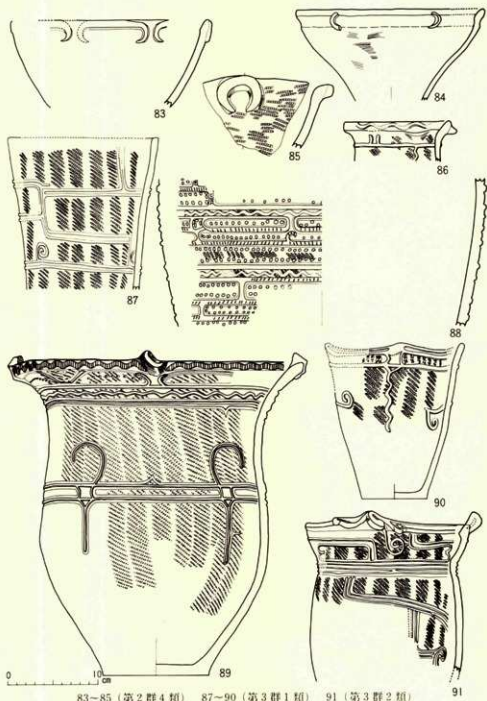
67~72 (第2群2類d)

第59圖 包含地出土土器実測圖 (34)

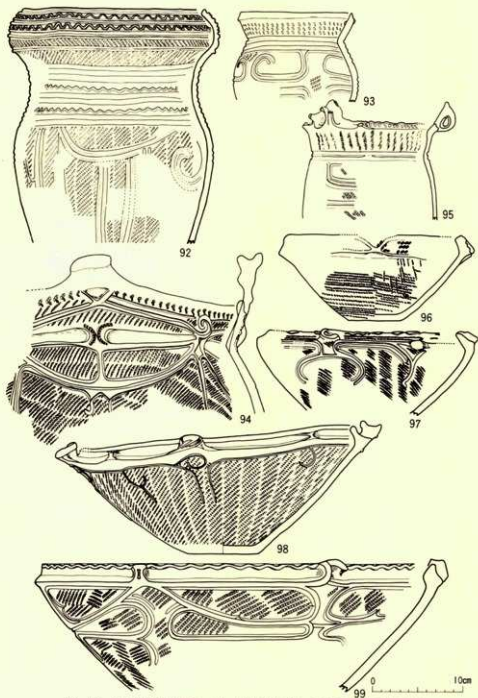


73-74 (第2群2類d) 76-80 (第2群3類a) 81-82 (第2群3類b)

第60図 包含地出土土器実測図(1/4)

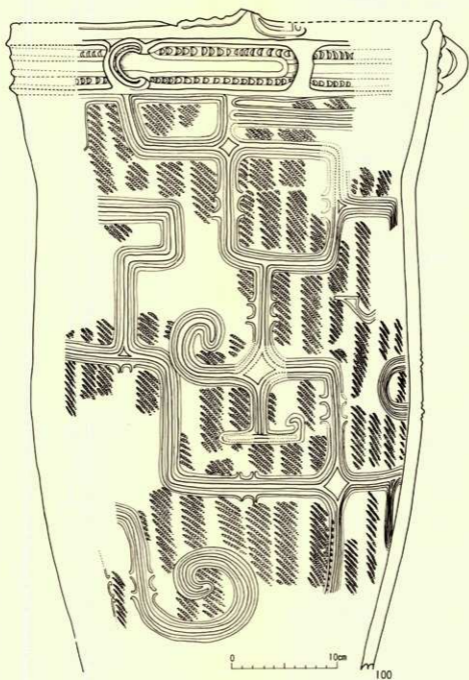


第61図 包含地出土土器実測図 (1/4)



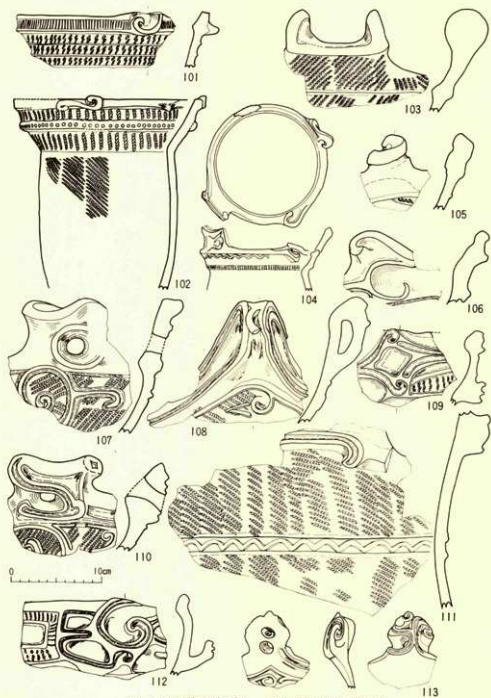
92~93, 95 (第3群2類) 94 (第3群3類) 96~99 (第3群4類)

第62図 包含地出土土器実測図 (1/4)



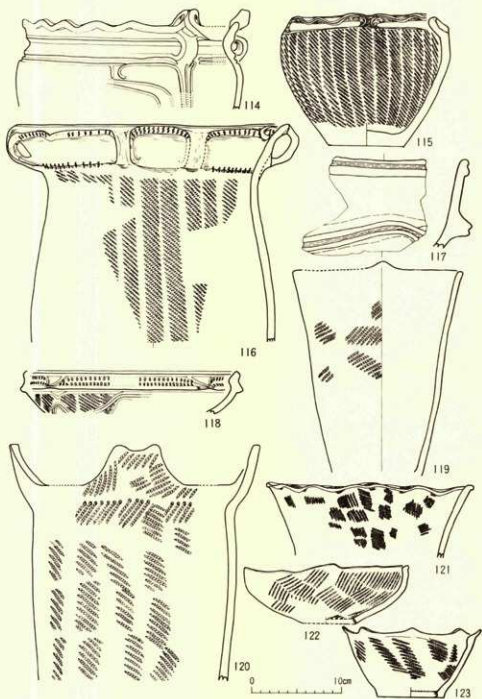
第3群3類

第63図 包含地出土土器実測図 (1/4)



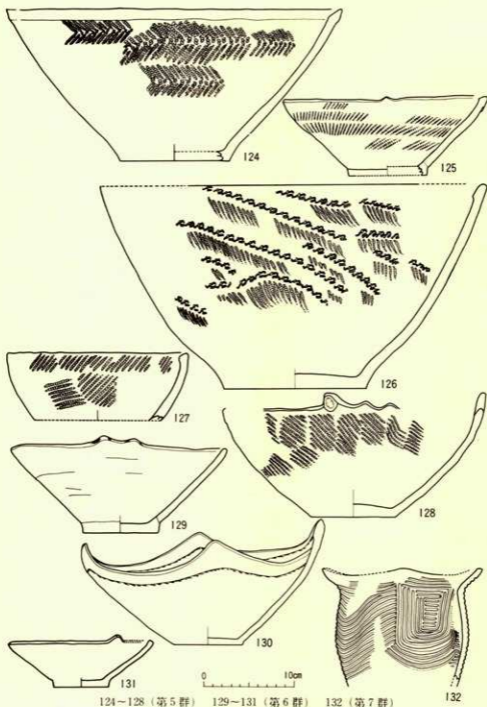
101-102 (第3群5類) 103-113 (第3群6類)

第64圖 包含地出土土器実測圖 (1/4)



114-117 (第3群6類) 118 (第4群2類) 119-123 (第5群)

第65圖 包含地出土土器実測図 (34)



第66図 包含地出土土器実測図 (1/4)

(2) 石器

剥片石器 (第67図～第76図) 図版27～31)

石核より剥離された剥片及び石核を素材とし、これに調整剥離を加えて製作された石器を一括して剥片石器として扱う。出土した剥片石器は246点、剥片等は1,536点、合計1,782点である。剥片石器には11種類の石材が使用されているが、中でも多いのは珪質凝灰質泥岩64点(26%)珪質細粒凝灰岩58点(23%)珪質泥岩51点(21%)等があげられる。剥片及び剥片石器の分布地域は重複している。分布地域は3ヶ所で、最も北はC・Dブロックの中央部にまばらに分布する。その南西方向でGブロック北西部に密集した分布地域があり、更に南のGブロックからIブロックの中央に南北に長い範囲に分布している。剥片石器の包含層は3層からなり、第I層より77点(31%)、第II層62点(25%)、第III層46点(19%)、出土層不明61点(25%)で、下の層になるほど出土量が少なくなる。

これらの剥片石器を形態的特徴、技術的特徴により、次の5群に大別する。

第1群：尖頭部と基部からなるもので、尖頭部は二等辺三角形形状にて先端は鋭く、基部の形態は多様である。小形の剥片に人念な調整剥離が加えられて製作され、剥片石器中最も小さい。

第2群：つまみ部と身幅の広い刃部からなるもので、刃部が縦長のものと横長のものがある。つまみ部及び縁辺に人念な調整剥離を加えて仕上げている。

第3群：つまみ部と尖頭部の錐部からなるもので、つまみ部は幅広で大きく、自然面や第1次剥離面が部分的に残っている。錐部は人念な調整剥離が加えられ、先端が鋭くなっている。

第4群：基部・胴部・刃部からなるもので、縦長にして身幅が広く、剥片石器の中では大形に属する。周縁全体と両面に調整剥離が加えられているものが大部分である。

第5群：不定形なもので、形態的には多種多様で特徴をとらえにくい。不定形ではあるが、剥片の周縁の一部又は全体に調整剥離を加えて刃部を作り出しているものである。

剥片石器第1群 (第67図～第68図 図版27)

剥片石器第1群は二等辺三角形を形態上の基調とし、鋭い尖頭部と基部からなるもので、石核に相当する。74点の出土で、剥片石器全体の30%と比較的多い。出土地点はGブロックからHブロックの中央に集中しており、出土層位は第I層33点(45%)で約半数に近い。使用石材は9種類で、珪質泥岩・黒曜石・珪質細粒凝灰岩等が多く使用されている。

出土総数74点のうち、完成品19点(26%)破損品55点(74%)で約 $\frac{3}{4}$ が破損品である。破損部位は尖頭部尖端破損が41点と非常に多く、次に基部の片側又は両側破損が35点である。

計測値についてみると、長さは11mm～42mmの範囲にあるが、13mm～21mmのものが多く、重量は0.3g～3.1g迄認められるが、0.5g付近に集中している。尖頭部先端角は14°～58°迄あるが、27°～46°のものが多く、尖頭部先端が尖頭状になっている。厚さは2mm～7mm迄あるが、

3mm～4mmの間に集中し、薄手のものが多い。横断面は凸レンズ状である。

基部は凹基、平基、丸基、凸基、棒状基と多様である。尖頭部側縁は強くふくらむもの、やや平坦なもの、くぼむもの等がある。全面に調整剥離が加えられている。

剥片石器第1群を基部形態によりA～Eに、尖頭部側縁形態の特徴によりⅠ～Ⅲに分け、夫々を組み合わせて次の様に分類する。

AⅠ類：基部の中央に抉りを入れて凹状(A)にし、尖頭部側縁が強くふくらむ(Ⅰ)もの。8点

AⅡ類：基部中央に抉りを入れて凹状とし、尖頭部側縁が平坦か基部に近い部分がわずかにふくらむ(Ⅱ)もの。15点

AⅢ類：基部中央に抉りを入れて凹状にし、尖頭部側縁が凹む(Ⅲ)もの。9点

BⅠ類：基部をほぼ平坦にし(B)、尖頭部側縁が強くふくらむもの。1点

BⅡ類：基部をほぼ平坦にし、尖頭部側縁がほぼ平坦か基部付近がわずかにふくらむもの11点

BⅢ類：基部をほぼ平坦にし、尖頭部側縁がくぼむもの。2点

B類：基部をほぼ平坦にしているか、破損により尖頭部側縁形態不明のもの。2点

CⅠ類：基部をふくらませ(C)、尖頭部側縁が強くふくらむもの。3点

CⅡ類：基部を丸くふくらませ、尖頭部側縁が平坦か基部付近がわずかに膨らむもの。6点

D₁Ⅱ類：基部の側縁に深く抉りを入れて凸状の茎をつくり出し(D₁)、尖頭部側縁がほぼ平坦か基部に近い部分がわずかにふくらむ。6点

D₂Ⅱ類：基部側縁に浅く抉りを入れて凸状の茎そっくり出し(D₂)尖頭部側縁がほぼ平坦か基部に近い部分がわずかにふくらむもの。5点

E類：尖頭部から基部にかけて揆状になっており、側縁がやや膨らむもの。1点

分類不能：破損により以上の分類にあてはめる事のできないもの。4点

石槍(第76図10) 尖頭部と基部からなり、第1群に属するものであるが、長さ5.7cm、幅2.3cm、重さ14.3gと長大なので別扱いにした。基部はややくぼんだ凹基で、尖頭部は非常に長く、側縁は膨らみ、横断面は凸レンズ状である。1点

剥片石器第2群 (第69図 図版28)

つまみ部と身幅の広い刃部からなり、石匙と相当し、17点の出土と少ない。剥片の上部左右より抉りが入れられる事によりつまみ部がつくり出され、横断面は変形をなす。刃部は縁辺の両面又は片面に調整剥離を加えて形成され、横断面は蒲鉾状である。

完形あるいはやや完形に近いもの7点、破損品10点である。破損部位は、両側辺下半に多く、次に側辺と先端の交わる尖頭状部分のものが多い。出土地点はGブロック両側とHブロック中央付近に集中している。出土層位は第1層5点、第2層4点、第3層2点、不明6点と上層が多く、下層程少ない。石材には6種類が使用されており、珪質凝灰質泥岩、珪質泥岩等が多く

使われている。

これを主要刃部とつまみ部の関係によりA・Bの二種類に大別し、また刃部を構成する縁辺の數刃部先端の状態等によりI・IIに細別する。A類は縦型石匙に、B類は横型石匙に相当する。

A類：主要刃部に対してつまみ部軸線が平行か、平行に近い斜方向のもので、主要刃部は左右いずれかの側辺にあるもの。

AI類：A類の中で、刃部が左右の側辺からなり、先端は尖頭状を呈す。3点

AII類：A類の中で、刃部が左右の側辺、先端部と三つの縁辺からなり先端は平坦で狭い。2点
その他、いずれも破損品で全形不明であるが、つまみ部と両肩部のつくりからA類に属するものと思われるもの。7点

B類：主要刃部に對し、つまみ部軸線が直角か、直角に近い斜方向のもので、主要刃部か先端の縁辺にあるもの。4点

分類不能：破損品により、つまみ部だけが残存し、全体の形状を推定できないもの。1点

剥片石器第3群（第76図1～9 図版31の1～9）

剥片石器第3群はつまみ部と尖頭状の錐部からなるもので、9点の出土と非常に少ない。完成品3点、破損品6点。破損部位は錐部又はその先端が5点、つまみ部1点である。この事よりこの群の石器は錐部か機能部分であったものと思われ、石錐に相当するものである。

剥辺の両側より袂りを入れて、つまみ部と錐部がつくり出されている。つまみ部には自然面や第1次剥離面が残るが、錐部は両面共に入念な調整剥離が加えられている。

出土地はHブロック中央付近が多く、出土層位は第I層、第II層から大半が出土している。石材には5種類が使用され、中でも珪質細粒凝灰岩が多い。

剥片石器第3群は、つまみ部の調整方法、つまみ部と錐部の状態、錐部の断面形態（横）等の特徴により分類する。

AIa類：つまみ部の一部に自然面が残る（A）、つまみ部から錐部へ移行する部分の袂りが深く急角度であり（I）、錐部の横断面形が四角形（a）のもの。2点

BIa類：つまみ部が主要剥離面と調整剥離面だけ（B）で、つまみ部から錐部へ移行する部分の袂りが浅く急角度で、錐部横断面形が四角形のもの。1点

BIa類：つまみ部が主要剥離面と調整剥離面からなり、つまみ部から錐部へ移行する部分の袂りが浅く緩やかな角度（II）で、錐部横断面形が四角形のもの。1点

BIb類：つまみ部の主要剥離面と調整剥離面からなり、つまみ部から錐部へ移行する部分の袂りが浅く、錐部横断面形が三角形（b）のもの。4点

分類不能：破損によりつまみ部が欠損して、錐部だけが残存するもので、錐部は長く、横断面形は四角形である。1点

剥片石器第4群 (第70図～第71図 図版29)

基部・胴部・刃部からなる縦長の石筥状の形をもつ石器で、26点出土。定形品13点、破損品13点である。欠損部分は基部3点、刃部6点、基部と刃部4点である。出土地はGブロックの西部に集中しており、出土層位は第Ⅰ層5点、第Ⅱ層6点、第Ⅲ層10点、不明5点で、下の層程出土点数が多い。使用石材は6種類で、珪質凝灰質泥岩・珪質細粒凝灰岩・硬質泥岩等が多く使われている。

全周縁に調整を加えているものが多い。特に刃部は入念な調整を加えており、片面加工4点、両面加工11点である。両面中央付近には主要剥離面や自然面が残る。胴部の横断面形は凸レンズ状13点、蒲鉾状13点である。大きさは、長さ53～81mm、幅19～43mm、厚さ8～21mm、重さ12.3～68.5gの範囲にある。

第4群は石筥状石器或いは打製石斧等に相当し、形態的特徴により分類する。

- 第A類：全形が細身で、両側縁はほぼ平行、丸味のある刃部で形成する縦長の楕円形状のもの、
第B類：基部が狭く、両側縁が刃部に向かって丸味をもちながら末広がりとなり、刃部もやや弧状を程する二等辺三角形を呈す。4点
第C類：両側縁が直線的又は丸味をもってほぼ平行にはしり、基部・刃部共に直線的で、短冊形もしくはそれに近い形のもの。3点
第D類：基部から刃部に向かって両側縁が直線的に開き、やや丸味のある刃部をもつ縦長の台形状を呈するもの。7点

分類不能：破損により、形状不明のもの。3点

剥片石器第5群 (第72図～第76図 120まで)

剥片の周縁に調整剥離が加えられているが、極めて多様で、形態的特徴をとらえにくいもので、120点と剥片石器の半数を占める。これ等は換器や削器に相当するものと思われる。

分布状態は、北西部より南東部にかけて楕円状の範囲にまばらではあるが、やや均一的な広がりをもって分布する。出土層位はⅠ層からⅢ層迄に各層等量的に包含されている。使用石材は9種類あるが、珪質凝灰質泥岩、珪質細粒凝灰岩、珪質泥岩等が多い。

形態は三角形、四角形状、楕円形状、不整形等多様であり、更に縦長のもの、横長のもの等がある。横断面は蒲鉾形が大半を占める。重量は2～28.8gの範囲にあるが、2～12gのものが大部分である。

剥片の打面より主軸にかけての中軸に対し、主要刃部と思われる縁辺が、平行か直角か、斜方向であってもいずれに近いかにより大別し、更に調整剥離の状態範囲等により細別する。

AI類：比較的大きい剥片の一部或いは一辺に調整剥離を加えており、主要部と思われる縁辺が中軸に直交又は直角に近い斜方向のもの。20点

AI類：AI類より小形で、楕円形状に形を整えており、剥片の縁辺の二辺以上に調整剥離を加えている。主要刃部と推定される縁辺が中軸に直交又は直角に近い斜方向のもの。32点

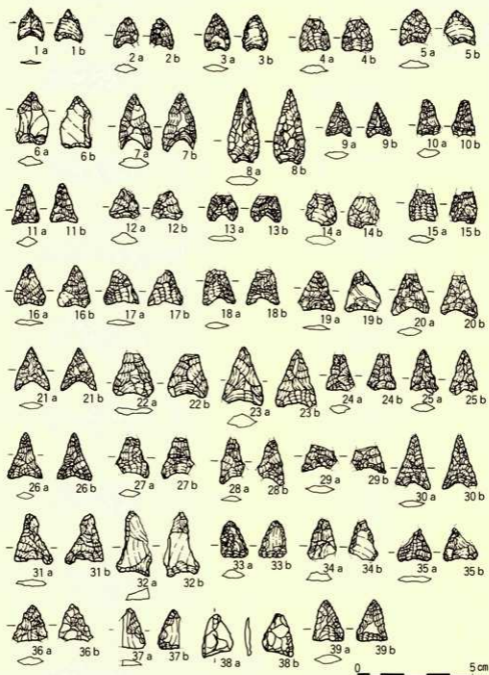
BI類：大きさ・形状等雑多で、剥片の縁辺の一部又は一辺に調整剥離を加えており、主要刃部と思われる縁辺が中軸に平行或いは平行に近い斜方向のもの。21点

BII類：BI類より小形であるが、縁辺の二辺以上に調整剥離を加え、縦長の楕円形状に形を整えたものが多く、主要刃部と思われる縁辺が中軸と平行又は平行に近い斜方向のもの。29点

不明：大きさ・形状共に雑多で、剥片石器の破損品類である。残存部分の縁辺には入念な調整剥離を加えているものが多い。17点

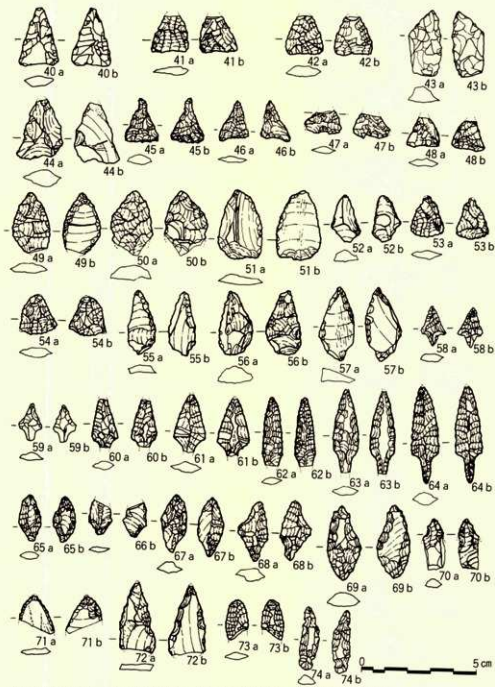
第16表 剥片石器各層出土点数及び使用石材

各 群 類	第 1 群					第 2 群		第 3 群		第 4 群			第 5 群			総 計	別 合 計									
	A	B	C	D	不	A	B	A	B	A	B	C	D	不	A			A	B	B	不					
	類	類	類	類	計	類	類	類	類	計	類	類	類	類	計			類	類	類	類	計				
柄 位	第 I 類	14	12	14	11	33	3	2	5	3	3	1	2	2	5	1	11	3	11	5	31	77	31			
	第 II 類	10	3	5	4	24	3	1	4	1	2	1	4	3	1	2	6	2	5	4	8	5	24	62	25	
	第 III 類	1	1	1		3	2		2	1		1	5	2	1	2	10	7	9	8	3	3	30	46	19	
	不 明	7	1	2	3	14	4	1	1	6	1	1	2	2	1	5	10	7	6	7	5	35	61	25		
	計	32	16	9	12	14	74	12	4	17	2	6	1	9	4	3	7	26	20	32	21	29	18	120	246	100
石 材	珪質凝灰質灰岩	3	4	1	1	2	11	5	1	1	7			1	2	3	7	8	10	7	10	4	39	64	26	
	珪質細粒凝灰岩	4	6	1	5	1	17	3		3	1	3	4	4	1	1	6	4	9	5	7	3	28	58	23	
	珪質泥岩	8	1	4	5	1	19	3	1	4	1	1	2	2	1	1	4	3	5	4	7	3	22	51	21	
	黒曜石	11	4	2			17				1	1						2	1	3	6		24	10		
	フリント							1	1	1	1	1			1			3	2	3	3		14	17	7	
	鉄石英	1	1	1	1		4											4	2	1	7		11	4		
	硬質泥岩							1	1				1	1	3	1	6							7	3	
	玉 類	1			1	2	1		1					1	1	2			1	1	2		7	3		
	めのう	1					1				1	1							1				1	3	1	
	蛋白石	1					1												1				1	2	1	
バラ石英	2					2																2	1			
計	32	16	9	11	14	74	12	4	17	2	6	1	9	4	3	7	26	20	32	21	29	18	120	246	100	



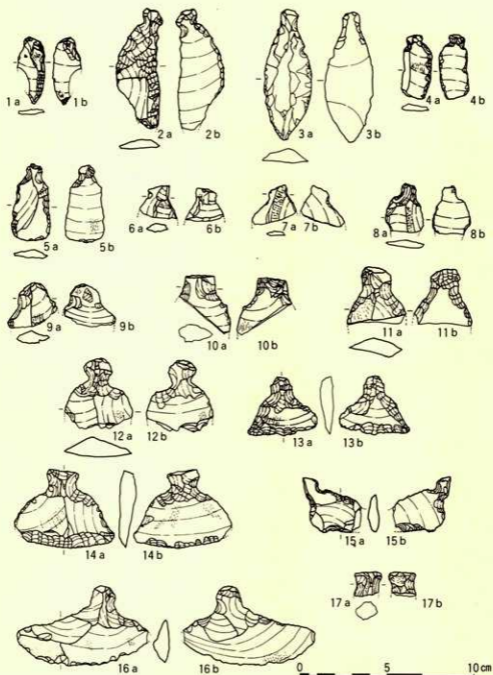
1~8 (AⅠ類) 9~23 (AⅡ類) 24~32 (AⅢ類) 33 (BⅠ類) 34~39 (BⅡ類)

第67図 剝片石器第1群(1)



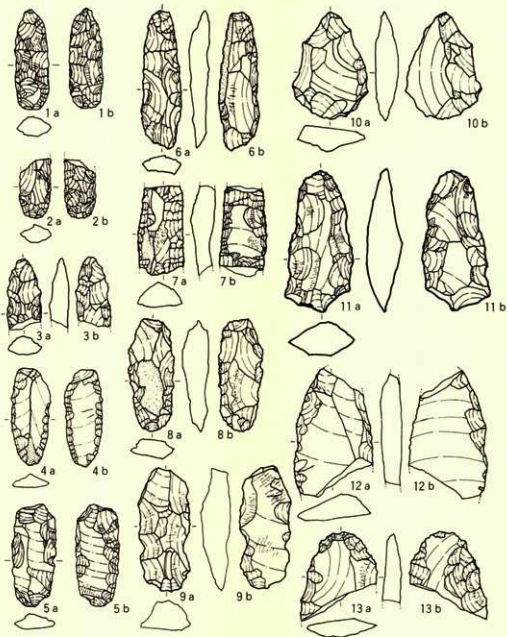
40~44 (B II 類) 47~48 (B 類) 49~51 (C I 類) 52~57 (C II 類)
 45~46 (B III 類) 65~67 (D II 類) 74 (E 類) 70~73 (分類不能) 58~64 (P I II 類)

第68図 剥片石器第1群(2)



1~3 (AⅠ類) 4~5 (AⅡ類) 6~12 (A類) 13~16 (BⅡ類) 17 (分類不能)

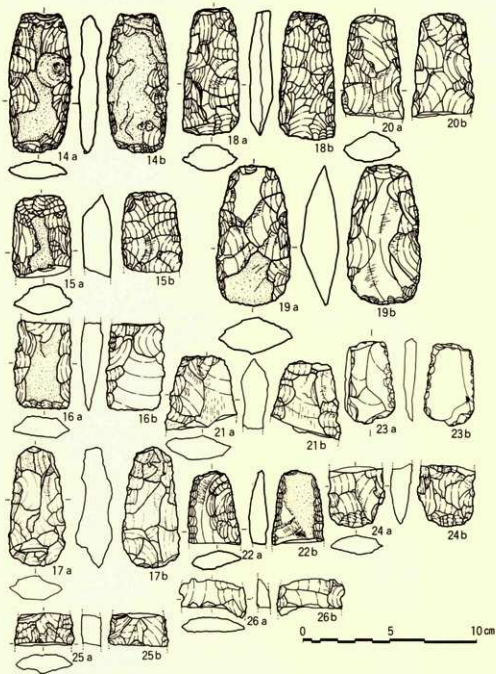
第69圖 剥片石器第2群



1-9 (第1類) 10-13 (第2類)

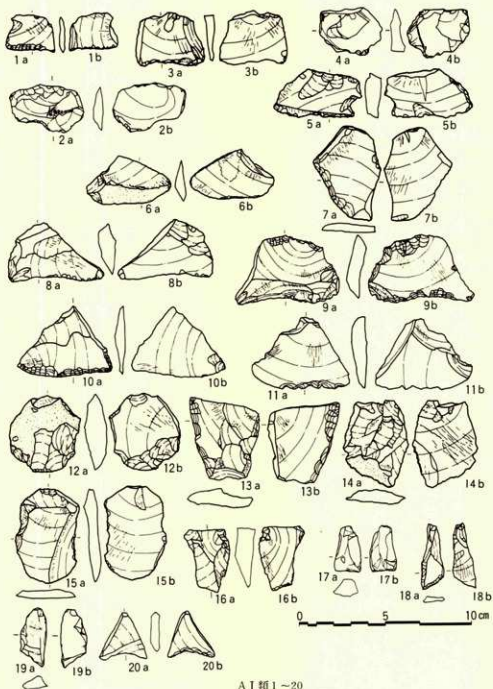
0 5 10cm

第70図 剥片石器第4群(1)



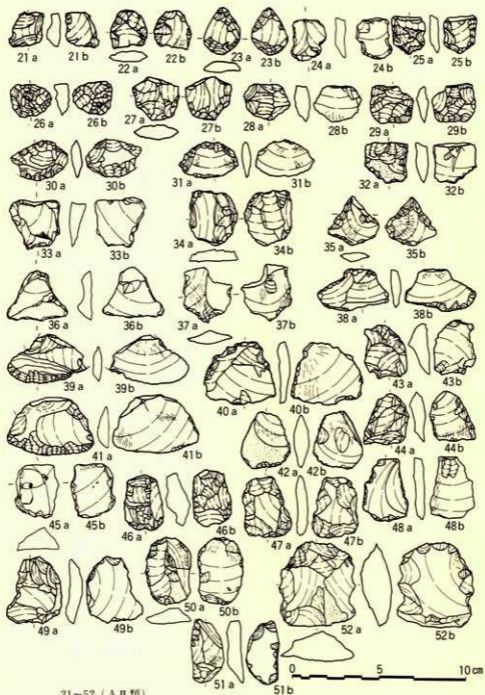
14~16 (第3類) 17~24 (第4類) 25~26 (分類不能)

第71図 剥片石器第4群 (2)



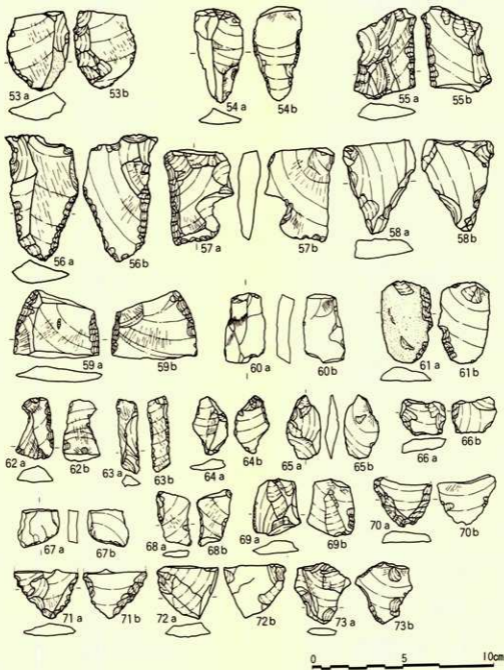
A I 類 1 ~ 20

第72図 剥片石器第5群 (1)



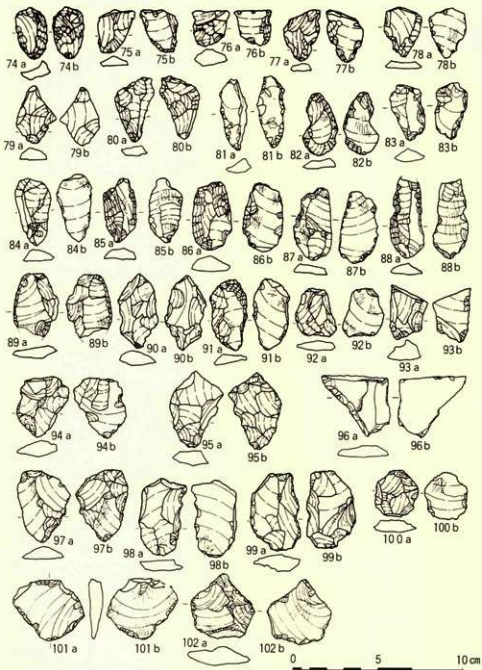
21-52 (A II 類)

第73図 剥片石器第5群(2)



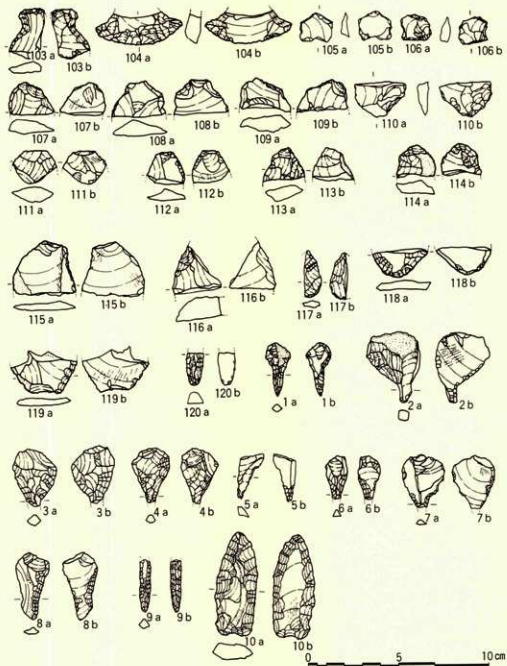
53~73 (B I 類)

第74図 剥片石器第5群 (3)



74-102 (BⅡ類)

第75図 剥片石器第5群 (4)



103~120 (第5群) 1~9 (第3群) 10 (第1群)

第76図 剥片石器第3群・5群(5)他

第17表 剥片石器第1群観察表

()は破損により正確な数値のないもの

図版	出土地	分類	基部		尖頭部側縁 膨み度			大 き さ (長さ×幅) mm	長幅 指数	厚さ mm	重 量 g	石 材
			挟り度	度	右	左	平均					
1	Hb62・I	A I	22	16	13	14.5	14 × 11.5	127	2	(0.3)	黒曜石	
2	Gh65II	A I (21)	-	19	19	19	13 × (10)	-	3.5	(0.3)	黒曜石	
3	Hi56I	A I	16	16	17	16.5	16 × 11	145	3	0.6	珩質細粒凝灰岩	
4	Ia53I	A I	18	-	-	-	(14) × 13	-	4	(0.7)	珩質細粒凝灰岩	
5	Fi65・II	A I (12)	-	17	17	17	15 × (14)	-	3	(0.7)	黒曜石	
6	Hf9III	A I	7	17	14	15.5	23 × 15	153	4	1.1	珩質細粒凝灰岩	
7	Hi53・I	A I (33)	12	10	11	11	(24) × (14)	-	4	(1.1)	珩質泥岩	
8	Ffg3・I	A I	18	11	13	12	32 × 14	228	3.5	1.4	珩質凝灰質泥岩	
9	4号	A II	17	7	7	7	15 × 11	136	3	0.3	黒曜石	
10	Gi3II	A II (12)	-	-	-	-	(15) × (12)	-	4	(0.4)	鉄石英	
11	Hf59・II	A II (8)	-	6	6	6	17 × 12	141	4	0.5	蛋白石	
12	4号	A II (14)	-	-	-	-	(13) × (13)	-	5	(1.25)	黒曜石	
13		A II	29	-	-	-	(21) × 13	-	2.5	(0.4)	黒曜石	
14	Hg6・I	A II	-	-	-	-	(14) × (13)	-	4	(0.8)	黒曜石	
15	Ib56・I	A II (11)	-	-	-	-	(13.5) × (12.5)	-	3	(0.5)	黒曜石	
16	Ha50・II	A II	6	9	15	12	18 × 14	128	2	0.5	黒曜石	
17	Ge6・II	A II	13	9	12	10.5	16 × 15	106	2	0.4	めのう	
18	Ie62・II	A II	21	-	-	-	(15) × 14	-	3	(0.6)	黒曜石	
19	Hf9・I	A II (8)	-	-	-	-	(17) × (16)	-	3	(0.5)	バラ石英	
20	He6	A II (19)	-	-	-	-	(17.5) × (16.5)	-	3	(0.7)	珩質泥岩	
21	Hf9・I	A II	30	7	9	8	18.5 × 15	123	3	0.5	珩質泥岩	
22	Gd3・I	A II	14	-	-	-	(19) × 18	-	3	(1.2)	珩質凝灰質泥岩	
23		A II	18	9	-	9	26 × 18	146	6	1.6	珩質細粒凝灰岩	
24	Hg56・II	A III	12	-	-	-	(16) × (12)	-	4	(0.5)	バラ石英	
25	Ia50・II	A III (28)	-	-	-	-	(19) × (12)	-	3	(0.5)	玉髄	
26	Hg62ビット	A III	12	0	0	0	20 × 15	133	3	0.5	黒曜石	
27	Gh3・I	A III (11)	-	-	-	-	(17) × (14)	-	3	(0.6)	珩質泥岩	
28	Hf9・I	A III (30)	-	-	-	-	(19) × (11)	-	3	(0.5)	珩質泥岩	
29	Hj56・I	A III (15)	-	-	-	-	(11) × (15)	-	3	(0.4)	珩質泥岩	

30	Ia53・II	A III (16)	-1	-	1	(24) × (15)	-	2.5	(0.5)	珩質泥岩
31	Ha62	A III 11	5	3	4	21 × 17	123	3	0.8	珩質泥岩
32	Hf9・I	A III 6	-	-	-	(27) × 14	-	5	(1.7)	珩質凝灰質泥岩
33	Hf59I	B I 5	7	7	7	16 × 11	154	4	0.7	黒曜石
34	Gf3・I	B II -	-	-	-	(18) × (12)	-	3.5	(0.8)	珩質細粒凝灰岩
35	Hf53I	B II 10	-	-	-	(14) × 15	-	2.5	(0.5)	黒曜石
36	Gj50	B II (8)	-	-	-	(16) × (15)	-	3.5	(0.7)	珩質凝灰質泥岩
37	He6・I	B II -	8	-	8	(17) × (10)	-	2	(0.5)	黒曜石
38	北館北方畑	B II -	-	-	-	(19) × (13)	-	2	(0.5)	珩質細粒凝灰岩
39	Gg6・I	B II 7	8	9	8.5	18 × 13	138	3.5	1.2	珩質凝灰質泥岩
40	De50・II	B II 5	-	-	-	(25) × 17	-	4.0	(1.4)	珩質細粒凝灰岩
41	Ha3I	B II 7	-	-	-	(16) × 16	-	3.5	(1.1)	鉄石英
42	Hg9・II	B II 3	-	-	-	(17) × 16	-	4.5	(1.7)	珩質細粒凝灰岩
43	Ca12・I	B II -	10	-	10	28 × (17)	-	7	(2.6)	珩質細粒凝灰岩
44	Ib56・I	B II 15	-	-	-	(25) × 21	-	7	(2.5)	珩質凝灰質泥岩
45	Hb6・II	B III -6	8	5	6.5	19 × 14	136	4	(0.3)	珩質細粒凝灰岩
46	Hj56・I	B III -6	7	6	6.5	16.5 × 12.5	132	3	(0.5)	珩質泥岩
47	Ia53・I	B -12	-	-	-	(11) × 16	-	3	(0.5)	黒曜石
48	Hi6・I	B -5	-	-	-	(13) × 14	-	4	(0.5)	珩質凝灰質泥岩
49	Ged24	C I (-46)	10	11	10.5	(27) × 16	-	4	(2.2)	珩質細粒凝灰岩
50	Gh3・II	C I -43	13	18	15.5	28 × 18	155	6.5	(3.1)	珩質凝灰質泥岩
51	Fij南 〜レトIII	C I -11	16	14	15	30 × 19	157	4	2.4	珩質泥岩
52	Hi59・II	C II -39	8	10	9	20 × 13	153	5	1	珩質泥岩
53	Ib53・I	C II -15	9	9	9	18 × 14	128	4	0.7	黒曜石
54	Hg12・II	C II -16	8	15	11.5	17 × 16	106	4	(1.1)	黒曜石
55	Id62・II	C II -48	9	6	7.5	28 × 12	233	3	1.5	鉄石英
56	Ged30・II	C II -34	20	6	13	28 × 15	186	7	3	珩質泥岩
57	Hg6	C II -60	10	9	9.5	32 × 15	213	6	2.3	珩質泥岩
58	Ie59III	DjII -48	8	8	8	8 × 11	163	3	0.5	珩質泥岩
59	Cd50	DjII (-60)	2	3	2.5	(16) × 10	-	3	(0.4)	珩質細粒凝灰岩
60	Ia59・II	DjII (-33)	-	-	-	(21.5) × 11	-	3.5	(0.9)	珩質細粒凝灰岩
61	Ha12・II	DjII (-47)	-	-	-	(26) × 14	-	4.5	(1.4)	珩質泥岩
62	Ie59	DjII (-57)	8	5	6.5	(30) × 9	-	2.5	(1.0)	鉄石英

63	Fj12・I	DII	(-92)	-	-	-	(36) × 11	-	3.5	(1.3)	珪質凝灰質泥岩
64	Gc27・II	DII	-112	7	7	7	(42) × 12	-	5.5	(1.5)	珪質細粒凝灰岩
65	Ha6・I	DII	-87	7	12	9.5	21 × 10	210	3.5	0.8	珪質泥岩
66	Hi6・I	DII	-56	-	-	-	(15) × 10	-	3	(0.4)	珪質細粒凝灰岩
67	Gi50II	DII	-115	10	7	8.5	25 × 11	27	5	1.2	珪質泥岩
68	FfgIII-1	DII	-92	8	6	7	26 × 13	200	5.5	1.5	珪質細粒凝灰岩
69	-	DII	-91	8	10	9	32 × 15	213	6	2.6	珪質泥岩
70	Hg62・I	-	-	-	-	-	(22) × 9	-	3.5	(1.1)	珪質泥岩
71	Ib56・II	-	-	-	-	-	(17) × 16	-	2.5	(0.5)	珪質凝灰質泥岩
72	GhIII・2	-	-	-	-	-	(30) × 16	-	2.5	(2.7)	珪質凝灰質泥岩
73	Ia53	-	-	-	-	-	(18) × (18)	-	(3)	(0.5)	玉髓
74	Hc6・I	E	-	15	15	15	28 × 8	350	4	(1.0)	珪質細粒凝灰岩

第18表 制片石器第2群観察表

()は破損により正確な数値のないもの

図版	出土地	分類	つまみ角	先端 刃部側縁	刃部角度			長さ×幅 mm	長幅 指数	重量 g	石材
					L D	M D	R D				
1	He6・I	AI	10°	0	35°	34°	42°	38 × 16	237	(2)	珪質泥岩
2	Gd27	AI	(29°)	-	①33° ②36°	①40° ②46°	①36° ②40°	(69) × 26	-	(9)	珪質泥岩
3	Ci50II	AI	7°	0	①28° ②27°	①45° ②33°	①45° ②37°	75 × 26	288	13.6	珪質細粒凝灰岩
4	Fij18	AII	15°	51	①21° ②27°	①34° ②33°	①30° ②42°	36 × 17	211	3.1	玉髓
5	不明	AII	0°	58	①36° ②47°	①43° ②46°	①52° ②47°	45 × 23	195	5.2	珪質細粒凝灰岩
6	Hg12p内	A	-	-	-	-	-	(20) × (22)	-	(2.2)	珪質泥岩
7	Hg12I	A	-	-	-	-	-	(23) × (26)	-	(1.5)	珪質凝灰質泥岩
8	Hi53I	A	-	-	-	-	-	(28) × 22	-	(2.7)	珪質凝灰質泥岩
9	Gi3II	A	-	-	-	-	-	(27) × (29)	-	(4.3)	珪質凝灰質泥岩
10	Ga30・III	A	-	-	-	-	-	(33) × (31)	-	(6.7)	珪質凝灰質泥岩
11	Fi24・III	A	-	-	-	-	①57° ②35°	(34) × (34)	-	(9.6)	珪質凝灰質泥岩
12	Gg30・II	A	-	-	-	-	①44° ②40°	(41) × (39)	-	(9)	珪質細粒凝灰岩
13	Ga30・II	BII	86°	174	①42° ②49°	40°	①46° ②43°	40 × 34	85	7.5	フリント
14	Ha62・I	BII	85°	-	①33° ②47°	40°	①45° ②37°	(57) × 45	-	17.6	珪質泥岩
15	Ea50・I	BII	66°	-	①39° ②40°	-	-	(34) × (31)	-	(6)	珪質凝灰質泥岩
16	Gd27	BII	(87°)	-	①38° ②34°	35°	①18° ②50°	(75) × 46	-	(23.4)	硬質泥岩
17	Ga27	-	-	-	-	-	-	(15) × (14)	-	(2.9)	珪質凝灰質泥岩

第19表 剥片石器第3群観察表

()は破損により正確な数値のないもの

図版	出土地	分類	錐部断面形	錐部角	錐部長 mm	長さ mm	幅 mm	重量 g	石材
1	Gh3・II	A Ia	四角形	70°	14	29	14	1.3	珪質泥岩
2	Fi j 24 III	A Ia	四角形	90°	10	39	29	9	珪質細粒凝灰岩
3	Ia 50・II	B Ia	四角形	86°	(4)	(32)	24	(5.2)	フリント
4	Gi 50	B II a	四角形	71°	(5)	(31)	21	(6.7)	めのう
5	Hg 62・I	B II b	三角形	41°	(17)	(26)	14	(1.5)	珪質細粒凝灰岩
6	Hd 53・II	B II b	三角形	53°	(8)	(24)	12	(2.7)	黒曜石
7	Hi 56・I	B II b	三角形	32°	(2)	(30)	23	(4.5)	珪質細粒凝灰岩
8	Ic 62・I	B II b	三角形	66°	14	36	19	3.3	珪質細粒凝灰岩
9	Id 62・II	a	四角形	83°	(29)	(29)	(6)	(1.2)	珪質泥岩

第20表 剥片石器第4群観察表

()は破損により正確な数値のないもの

図版	出土地	分類	a面調整	b面調整	刃部加工	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	石材
1	Gab 24・27 III	1類	全面調整	全面調整	両面加工	55	19	11	12.3	珪質凝灰質泥岩
2	Gab 36・27 III	1類	全面調整	全面調整	両面加工	(33)	(18)	(10)	(5.7)	硬質泥岩
3	Ge 30・II	1類	全面調整	全面調整		(39)	(19)	(10)	(7.6)	珪質細粒凝灰岩
4	Fg 不明 I	1類	両側縁調整	両側縁調整		53	22	8	12.5	フリント
5	Hi 50・II	1類	両側縁部分調整	両側縁調整	両面加工	56	24	9	14.4	珪質細粒凝灰岩
6	Gab 24・II	1類	全面粗い調整	右側縁刃部調整	両面加工	76	22	11	19.1	珪質細粒凝灰岩
7	Gab 27・III	1類	両側縁調整	両側縁調整		(49)	25	13	(19.2)	珪質泥岩
8	Gab 30・II (I)	1類	全周縁調整	全周縁調整	両面加工	62	25	14	23.5	珪質泥岩
9	Fi j 30 III-I	1類	全面粗い調整	両側縁部分調整	片面加工	68	28	16	28.4	珪質細粒凝灰岩
10	Ge 27	2類	全周縁調整	右側縁調整	片面加工	59	42	13	30	珪質泥岩
11	Fi j 24 I-I	2類	全周縁調整	全周縁調整	両面加工	78	36	20	50.9	珪質泥岩
12	Ff 21	2類	両側縁調整	右側縁部分調整		(70)	(43)	(13)	(34.1)	玉髓
13	Gab 24・I	2類	全周縁調整	全周縁調整		(50)	(42)	(10)	(17)	珪質細粒凝灰岩
14	Gab 27 II	3類	全周縁調整	全周縁調整	両面加工	80	35	11	37.3	珪質細粒凝灰岩
15	Fi j III	3類	全周縁調整	全面調整		(46)	(33)	(16)	(36)	珪質凝灰質泥岩
16	Gab 30・III	3類	全周縁調整	左側縁調整	片面加工	(49)	33	(12)	(26.3)	珪質凝灰質泥岩
17	Fi j 24 I	4類	全面粗い調整	全面粗い調整	両面加工	68	32	21	47.7	珪質泥岩
18	Gab 24・II	4類	両側縁刃部調整	両側縁刃部調整	両面加工	73	32	15	38.3	硬質泥岩
19	Ji 95	4類	両側縁調整	全周縁調整	片面加工	81	43	20	68.5	硬質泥岩

20	Ge 30-III-3	4類	全面調整	全面調整		(60)	(34)	(17)	(41.3)	硬質泥岩
21	Fgh 24~27 南	4類	左側縁調整	両側縁調整		(44)	(41)	(15)	(26)	珪質凝灰質泥岩
22	Ge d 21-II	4類	全周縁調整	全周縁調整		(43)	(30)	(10)	(14.8)	珪質凝灰質泥岩
23	Cg h 3-I	4類	全面調整	左側縁 ^{一部} 調整	両面加工	47	28	7	12.4	珪質凝灰質泥岩
24	Ge d 21 III	不明	全面調整	全面調整	両面加工	(35)	(33)	(11)	(14.9)	硬質泥岩
25	Ga 30	不明	両側縁調整	両側縁調整		(19)	(34)	(11)	(9.7)	珪質凝灰質泥岩
26	Ga 27 III	不明	右側縁調整	両側縁調整		(22)	(39)	(8)	(6.6)	玉髓

第21表 制片石器第5群観察表

図版	出土地	分類	a面の調整	b面の調整	長さ	幅	重量	石	材
1	Gb 27-III-3	A I	下端調整	下端部分調整	22	28	3.3	フリント	
2	De f 9	A I	左右側辺調整	下端調整	26	35	8.3	珪質細粒凝灰岩	
3	Ge 30-III-3	A I	下端調整	無調整	30	39	9.0	珪質凝灰質泥岩	
4	Ci 31	A I	下端調整	無調整	27	42	6.4	珪質凝灰質泥岩	
5	Hj 56-II	A I	下端調整	右側辺調整	28	51	15.2	珪質細粒凝灰岩	
6	Ge d 27 III	A I	右先端調整	左側辺・下端調整	28	49	8.8	フリント	
7	Ga 27-III	A I	左側辺調整	無調整	53	39	15.3	珪質凝灰質泥岩	
8	Gb 30-III-3	A I	左側辺部分・下端調整	下端部分調整	34	55	14.8	珪質凝灰質泥岩	
9	Hj 50-I	A I	上端・下端調整	上端・左側辺・下端調整	39	60	18.7	珪質泥岩	
10	He 6	A I	右側辺部分・下端調整	無調整	40	55	10.8	珪質凝灰質泥岩	
11	Fgh 24-27	A I	下端調整	無調整	41	56	18.0	珪質凝灰質泥岩	
12	Ha 65	A I	下端調整・自然面残	下端調整	44	40	28.7	珪質細粒凝灰岩	
13	Ge 27-III-4	A I	左右側辺調整	左側辺調整	48	40	17.7	珪質凝灰質泥岩	
14	Gh 不明	A I	全面粗い調整・自然面残	左側辺下半調整	50	38	16.3	珪質泥岩	
15	Ge d 30 III	A I	右側辺部分調整	左側辺部分調整	54	36	14.5	フリント	
16	Hf 9 III	A I	無調整	下端調整	36	26	9.4	珪質泥岩	
17	Df 15 II	A I	全面粗い調整	下端調整	26	14	4.0	珪質細粒凝灰岩	
18	Hf 9	A I	左側辺部分・下端調整	左側辺部分調整	37	13	3.1	めのう	
19	北館北方畑	A I	下端調整	無調整	34	15	3.6	蛋白石	
20	不明	A I	無調整	下端調整	27	28	4.0	珪質凝灰質泥岩	
21	Ge 24-III	A II	右側辺・下端調整	無調整	20	20	3.2	鉄石英	
22	2号住	A II	全周縁調整	全周縁調整	22	22	4.8	珪質凝灰質泥岩	
23	Gd 65-I	A II	左右側辺部分・下端調整	全周縁調整	27	21	4	珪質凝灰質泥岩	

24	He6-II	A II 両側辺・下端調整	下端調整	24	19	28	珪質細粒凝灰岩
25	Hb3-I	A II 全面調整	全周縁調整	22	18	3.5	黒曜石
26	Ha56I	A II 全面調整	全面調整	19	23	3.9	黒曜石
27	Id62III	A II 全面調整	両側辺・下端調整	24	27	6.3	珪質凝灰質泥岩
28	Hi62表土下	A II 全面調整	無調整	20	27	5.0	珪質凝灰質泥岩
29	Gf27-II	A II 全面調整	全面調整	22	25	3.8	珪質泥岩
30	Hf15	A II 全面調整	全面調整	23	33	4.7	珪質細粒凝灰岩
31	Ggh30-II-2	A II 全周縁調整	無調整	21	34	4.3	鉄石英
32	Gh3-I	A II 全周縁調整	下端調整	23	24	4.0	珪質凝灰質泥岩
33	De50II	A II 下端調整	無調整	32	32	7.6	珪質泥岩
34	Ge30III-6	A II 左側辺・下端調整	上端・左側辺調整	32	28	7.6	珪質細粒凝灰岩
35	Hf9	A II 全周縁調整	全周縁調整	28	29	3.2	珪質細粒凝灰岩
36	Dd50	A II 下端調整	無調整	29	35	6.6	フリント
37	Hf121	A II 両側辺・下端調整	右側辺・下端調整	32	29	6.2	珪質凝灰質泥岩
38	Fi j30 I	A II 両側辺調整	下端調整	24	41	6.4	珪質泥岩
39	Jf52-I	A II 下端調整	無調整	28	45	9.2	珪質泥岩
40	Ia53-I	A II 左側辺調整	左側辺・下端部分調整	36	42	10.7	珪質細粒凝灰岩
41	Hf9-III	A II 右側辺・下端調整	右側辺下端調整	33	50	16.3	珪質泥岩
42	Gc30-II	A II 下端調整	左側辺下端調整	32	28	8.6	フリント
43	Hd50-II	A II 全面調整	無調整	30	24	7.3	珪質凝灰質泥岩
44	Fi j56III-1	A II 全面調整	両側辺調整	29	25	6.2	鉄石英
45	Ee24	A II 右側辺下端調整	左側辺・下端調整	30	24	9.6	珪質凝灰質泥岩
46	Hi59	A II 左側辺下端調整	両側辺調整	32	22	9.6	珪質細粒凝灰岩
47	Fi30-III	A II 全周縁調整	全周縁調整	35	27	8	珪質細粒凝灰岩
48	Gd30-III	A II 両側辺・下端調整	無調整	35	26	5.3	珪質細粒凝灰岩
49	Ge430II	A II 左側辺・下端調整	右側辺部分調整	39	32	10	珪質細粒凝灰岩
50	Hh121	A II 両側辺調整	左側辺部分・下端調整	39	26	9.8	鉄石英
51	Id56-I	A II 全面粗い調整	全周縁部分調整	37	18	7.9	珪質凝灰質泥岩
52	Gab28-30III	A II 全面粗い調整	左側辺粗い調整	49	43	38.8	珪質凝灰質泥岩
53	Ge30III-3	B I 左側辺調整	右側辺調整	44	34	22.1	鉄石英
54	Gf53	B I 無調整	両側辺調整	52	26	10.7	珪質凝灰質泥岩
55	Ghb30-III	B I 左右側辺調整	左右側辺調整	48	33	6.2	フリント

56	Ca b 30-Ⅲ	B I 両側辺下端調整	両側辺下端調整	70	37	29.3	珪質凝灰質泥岩
57	He 56	B I 左側辺・下端調整	左側辺・下端部分調整	52	36	22.8	珪質凝灰質泥岩
58	Hb 65-I	B I 右側辺調整	左側辺・右側辺部分調整	50	40	22.8	珪質細粒凝灰岩
59	Fj 27Ⅱ	B I 両側辺調整	両側辺調整	(37)	47	14.7	珪質凝灰質泥岩
60	De 59Ⅱ	B I 全面粗い調整	左側辺部分調整	39	22	8.1	鉄石英
61	Hj 65Ⅱ	B I 右側辺調整他は自然面	左側辺下半調整	45	28	13.5	珪質細粒凝灰岩
62	Gi 50	B I 両側辺・下端部分調整	両側辺部分調整	34	21	5.3	珪質細粒凝灰岩
63	Ge d 24Ⅲ-3	B I 両側辺部分調整	両側辺調整	42	11	2.5	フリント
64	Ca b 24-27	B I 両側辺部分調整	両側辺部分調整	32	19	3.1	珪質泥岩
65	I e 62 I	B I 左側辺部分調整	無調整	35	19	4.1	珪質凝灰質泥岩
66	Ha 6 I	B I 両側辺部分調整	左側辺調整	20	25	4.6	珪質泥岩
67	Dg 59	B I 左側辺調整	無調整	21	22	3.9	珪質凝灰質泥岩
68	Ge 27Ⅱ	B I 左側辺上半調整	両側辺調整	30	19	2	フリント
69	Hg 12Ⅱ	B I 左側辺調整	右側辺調整	31	26	6.9	珪質泥岩
70	Hi 56Ⅱ	B I 両側辺調整	無調整	27	32	5.6	珪質泥岩
71	Ge d 27-30Ⅲ	B I 両側辺調整	両側辺調整	(27)	(35)	6.2	珪質細粒凝灰岩
72	Fh 27Ⅱ	B I 全面粗い調整	無調整	29	34	11	珪質凝灰質泥岩
73	Ge d 27-30Ⅲ	B I 左側辺部分調整	両側辺部分調整	34	31	6.2	珪質細粒凝灰岩
74	Hj 56Ⅱ	B II 全周縁調整	全周縁調整	30	18	4.5	珪質凝灰質泥岩
75	Fi 15 I	B II 全面粗い調整	全周縁調整	26	22	3.5	珪質凝灰質泥岩
76	Gr 53Ⅱ	B II 左側辺下半調整	右側辺調整	21	22	4.2	珪質細粒凝灰岩
77	I b 65-I	B II 全周縁調整	全周縁調整	30	22	4.6	珪質泥岩
78	Hj 56-I	B II 両側辺調整	右側辺部分調整	29	22	3.7	珪質凝灰質泥岩
79	Hj 56-II	B II 両側辺下半調整	右側辺下半調整	34	23	6.5	珪質細粒凝灰岩
80	Hj 50-II	B II 左側辺調整	両側辺部分調整	38	24	6.5	珪質泥岩
81	Ce 50	B II 両側辺調整	両側辺調整	42	16	4.7	珪質凝灰質泥岩
82	Gi 50	B II 全周縁調整	左側辺・下端調整	37	21	4.7	珪質泥岩
83	Dh 53	B II 右側辺調整	両側辺調整	33	19	4.7	珪質泥岩
84	Hg 12Ⅱ	B II 右側辺粗い調整	左側辺調整	40	21	6	珪質泥岩
85	Ha 50 I	B II 全周縁調整	両側辺部分調整	38	20	5.5	珪質凝灰質泥岩
86	Gi 50Ⅱ	B II 全周縁調整	全周縁部分調整	40	23	9.8	珪質凝灰質泥岩
87	Gi 60-I	B II 左側辺調整	両側辺調整	43	23	7.3	珪質細粒凝灰岩

88	Ha65-I	B II 両側辺調整	両側辺部分調整	(47)	21	(6.6)	珪質凝灰質泥岩
89	Gd27 III-5	B II 左側辺調整	右側辺調整	(37)	28	(7.6)	珪質凝灰質泥岩
90	Fj30 II	B II 全面調整	全面調整	43	23	8.1	珪質細粒凝灰岩
91	Ha56-I	B II 右側辺調整	両側辺部分調整	42	22	6.7	珪質細粒凝灰岩
92	Ha56-II	B II 全面調整	無調整	28	25	4.5	珪質細粒凝灰岩
93	Hg9-II	B II 左側辺・下端調整	右側辺・下端調整	32	22	7.3	黒曜石
94	Ia53-I	B II 全面調整	無調整	36	30	10.3	フリント
95	He6-I	B II 全面調整	全面調整	45	31	11	玉 髓
96	Df50-I	B II 両側辺・下端調整	無調整	35	39	10	珪質凝灰質泥岩
97	Gd27-III	B II 右側辺下半調整	上端・右側辺調整	42	31	10	フリント
98	He6	B II 両側辺部分調整	左側辺部分調整	45	26	9.9	珪質細粒凝灰岩
99	Hi12	B II 両側辺調整	両側辺調整	45	28	13.7	珪質凝灰質泥岩
100	Hj59	B II 全面調整	無調整	27	25	5.9	フリント
101	Ia62-II	B II 全周縁調整	両側辺部分調整	36	42	1.7	珪質泥岩
102	Ha6-I	B II 両側辺調整	両側辺部分・下端調整	39	38	3.2	珪質泥岩
103	Ged27 III	不明 左側辺調整	右側辺調整	(28)	(22)	(4)	フリント
104	Gab30	不明 全周縁調整	両側辺・下端調整	(18)	(48)	(7.4)	玉 髓
105	Ee6	不明 左側辺・下端調整	下端調整	15	18	1.2	珪質凝灰質泥岩
106	不明	不明 両側辺・下端調整	下端調整	15	15	1.2	黒曜石
107	Ic62-I	不明 全面調整	無調整	18	25	3.7	鉄石英
108	Ga30-II	不明 両側辺調整	基部調整	(19)	(30)	(5.3)	珪質凝灰質泥岩
109	He12-II	不明 左側辺調整	左側辺調整	(20)	(28)	(4.4)	珪質泥岩
110	Def6 II	不明 両側辺調整	右側辺部分調整	(19)	(28)	(3.6)	珪質細粒凝灰岩
111	Gh3-I	不明 両側辺調整	無調整	(18)	(24)	(3.8)	珪質泥岩
112	Hf50-I	不明 右側辺調整	左側辺部分調整	(18)	(21)	(2.3)	珪質泥岩
113	Hj56-II	不明 右側辺調整	無調整・自然面残	(18)	(23)	(2.6)	珪質凝灰質泥岩
114	Ic15	不明 左側辺調整	右側辺調整	18	22	3.4	黒曜石
115	Gd30-II	不明 右側辺調整	無調整	(30)	(35)	(5.6)	珪質細粒凝灰岩
116	Ie62-III	不明 左側辺調整	無調整	(26)	(27)	(6.5)	珪質細粒凝灰岩
117	Gi53I	不明 全面調整	全面調整	(26)	(9)	(1.1)	黒曜石
118	Ged24 III-3	不明 両側辺調整	無調整	(15)	(31)	(2.6)	フリント
119	Jh75	不明 右側辺調整	無調整	23	36	4.4	フリント
120	Ic62-I	不明 全面調整	無調整	(18)	(0.5)	(1.1)	珪質凝灰質泥岩

磨製石斧 (第77図 図版32)

平面形が斧状を呈し、頭部・胴部・刃部からなり、最終的に研磨して形を整えている石器を一括して磨製石斧として扱う。12点の出土で、定形・やや定形が6点、破損品6点である。頭部・刃部の破損するものが多いので、胴部の平面形や横断面形等の特徴により分類する。

I類：胴部両側縁が平行状の短冊形で、刃部頭部指数が100に近いもの。研磨が粗雑で、全形が整っていない。8点。胴部横断面形は次の3つの形がある。

- a：胴部横断面形が蒲鉾形のもの。Ia。3点
- b：胴部横断面形が楕円状であるが、側面の一方がやや平坦なもの。Ib。2点
- c：胴部横断面形が長方形状で、隅が丸いもの。Ic。3点

II類：胴部側縁が頭部より刃部に向かって幅が広がる楔形で、刃部頭部指数が200に近いもの。全面よく研磨され、整った形をしている。胴部横断面形は次の2つの形がある。

- c：胴部横断面形が長方形状で、隅が丸いもの。IIc。1点
- d：胴部横断面形が楕円形状のもの。IId。3点

出土地はFg~Gdブロックの両部に集中して8点、Hj~Ieブロックの中央に3点、Db52 グリッドに1点で、3ヶ所に分布する。出土層はI層1点、II層1点、III層9点、不明1点でIII層から多く出土している。

第22表 磨製石斧観察表

図版	出土地	分類	長さ mm	胴部巾 mm	刃部巾 mm	厚さ mm	刃部 傾角 指数	刃部 角度 °	重量 g	石 材	備 考	登録 No
1	Fg27B-3	I a	107	17	37	26	217	45°	176	粘板岩	定形品	3
2	Ie59B (22)	I a	142	31	27	16	87	45°	(148)	粘板岩	刃こぼれ、敲打痕	10
3	Db52B-2	I a (119)	32	32	18	100	不明	(141)	粘板岩	刃部・胴部破損	1	
4	Ca30-B1	I b (104)	33	32	23	97	不明	(150)	粘板岩	刃部縦方向線状痕、刃縁破損敲打痕	5	
5	Ge27B-2	I b	80	46	46	24	100	53°	(128)	淡灰色凝灰岩質泥岩性粘板岩	刃部・胴部破損	6
6	Gd27B-3	I c (67)	30		25			(123)	粘板岩	胴部下半欠損、敲打痕	8	
7	Ca30-301	I c	89	15	14	10	93	39°	22	凝灰岩質泥岩性粘板岩	刃こぼれ、敲打痕	12
8	Gd27B-3	I c (125)	(21)	(26)	16		49°	(104)	粘板岩	刃部線状痕、敲打痕・胴部欠損	7	
9	Fj21B-2	II c (116)	19	43	18	226	不明	(149)	粘板岩	刃部欠損	4	
10	Fg324B-2	II d (107)	34		(25)			(163)	淡緑色凝灰岩	胴部破損・胴部下半欠損	2	
11	Hj50B	II d	114	17	35	25	205	53°	191	淡緑色凝灰岩	定形品・刃部斜方向線状痕	9
12	Ie59p11埋土	II d (133)	21		29			(287)	淡緑色凝灰岩	刃部欠損・敲打痕	11	

大きさを長さからみると80～142cmの範囲に、重量は104～287gの範囲におさまるが、まともはみられない。使用されている石材は粘板岩7点、淡緑色凝灰岩3点、凝灰岩質泥岩団核2点の3種であり、Ⅰ類は粘板岩が多く、Ⅱ類は淡緑色凝灰岩が多い。製作痕跡は部分的に敲打痕を残すものがあり、他は研磨擦痕がみられる。研磨擦痕は中心軸に対して頭部は直交、胴部は平行か斜方向、刃部は平行に走る。使用痕跡は刃部に斜方向や縦方向の線状痕が観察され、刃こぼれ等の刃部破損がみられる。

礫石器 (第78図～第82図 図版33～38)

素材の形をあまり変えないで、部分的に加工或いは使用している石器を礫石器として扱う。形態的特徴や機能等により次の様に大別する。

1. 凹石、円礫の一部に、敲打痕を残す小さなくぼみのある石器
2. 磨石、円礫の一部に擦痕を有する比較的平坦な磨面のある石器
3. 石皿、節理による板状の石や円礫をまた板や鉢状に加工した石器
4. その他、自然礫の一部に加工痕或使用痕のある石器

凹石 (第78図1～3 図版33の1～3)

円礫の上下二面に夫々平坦な磨面があり、磨面の中央付近に数個の小さい凹みのある石器である。3点出土しており、いずれも完成品である。凹石の平面形は楕円形を基本としているが、側面と平坦な磨面があるため一部直線的になるものもある。断面は楕円形を基本としている。

凹みの平面形は円形・楕円形をし、断面形はV字状と皿状のものがある。凹みの中は全て敲打痕が観察される。凹部の位置は上下両面の平坦な磨石の中央付近にある。凹みの数は各凹石の上下両面においてほぼ同数で、各々の面において確認される凹みの数は2個、3個、4個、6個等がある。

石材はすべて輝石安山岩が使用されている。大きさは長さが107～143cm、幅64～93cmの範囲にあり、重量は680～875gの範囲におさまる。

出土地はGブロック西部とIブロック中央付近で、出土層は不明である。

第23表 凹石観察表

図版	出土地	長さ mm	幅 mm	長軸 指数	厚さ mm	重量 g	凹の数		石 材	備 考	登録No
							上面	下面			
1	Gab21	107	88	121	58	710	2	2	輝石安山岩		15
2	不 明	119	93	127	59	875	4	4	輝石安山岩		16
3	Ie50	143	64	223	48	680	6	3	輝石安山岩	片側面・平坦磨面	30

磨石 (第78図4～第80図20 図版33の4～図版34)

自然礫の一部に平坦な磨面がある石器で16点の出土。完成品13点、破損品3点である。出土

地は Fh~Fj ブロックの西部と Ie ブロックの中央部で、磨製石斧の分布地と重複している。

出土層は III 層出土が多い。磨石の平面形は円形状や楕円形状であり、断面形は円形・楕円形・三角形・長方形等があるが、円形・楕円形状のものが多い。大きさは長軸が 4.7~19.2cm、短軸 11.3cm の範囲にあり、長軸 10cm 以内のものは長軸と短軸の長さが接近し、それ以上のものは長軸と短軸の差が大きい。凹石と同じ位の大きさのものもあるが、はるかに小さいものもある。重量は 75~1,352g の範囲にあるが、75~300g の間に集中し、他はまばらな重量分布を示す。使用石材は 4 種類で、輝石安山岩が 13 点と大半を占める。使用痕跡は、他と区別される平坦な磨面があり、上面・下面・側面に観察される。磨面の中に敲打痕の認められるものもある。尚すり棒 1 点があり、下半に擦痕の見られる磨面がある。

磨石を磨面の位置や断面形により 3 群に分類する。

1 群：磨面が下面だけにあり、横断面は円形や楕円形のもの。9 点

2 群：磨面が上下両面にあり、横断面が楕円形や隅丸長方形のもの。5 点

3 群：磨面が下面と両側面にあり、横断面が三角形のもの。2 点

第24表 磨石観察表

()は破損により正確な数値のないもの

図版	出土地	分類	長さ mm	幅 mm	長幅 指数	厚さ mm	重量 g	石 材	備 考	登録 No.
4	F130	1	42	40	105	37	80	輝石安山岩		20
5	不 明	1	49	46	106	35	75	白色凝灰岩質凝灰岩		27
6	Fh30Ⅲ	1	51	49	104	33	107	輝石安山岩		21
7	Fij27Ⅲ-3	1	68	57	119	40	211	輝石安山岩		17
8	Ie62Ⅲ	1	69	51	135	50	235	輝石安山岩		24
9	Fij27Ⅲ-5	1	70	59	119	55	300	凝灰岩質砂岩		18
10	Fij南ベルトⅢ-3	1	76	(60)	—	(60)	(436)	凝灰岩質泥岩切核	破損品	19
11	Id59p ₂	1	(87)	78	—	72	(680)	輝石安山岩	破損品	22
12	Id59p ₁	1	121	83	145	70	1,045	輝石安山岩		23
13	Ie59Ⅲ	2	76	76	100	24	218	輝石安山岩		29
14	Fd27Ⅲ	2	129	113	114	30	618	輝石安山岩	上・下面敲打痕	48
15	24Ⅱ	2	123	79	155	70	793	輝石安山岩	下面敲打痕	25
16	不 明	2	153	77	198	52	1,043	輝石安山岩		26
17	Ge30Ⅲ-3	2	192	90	213	36	1,352	輝石安山岩		53
18	Id59p ₂	3	180	62	290	55	794	輝石安山岩		28
19	Hg12落ち込み	3	(116)	63	—	66	(735)	輝石安山岩	破損品	57
20	Cd6クロホク上層	すり棒	106	22	481	13	46	凝灰岩		

石皿等 (第80図1～第81図 図版35～37)

14点の出土である。完形なもの3点、他の11点は破損品である。使用面の形状により3群に分ける。使用石材は輝石安山岩13点で、硬砂岩1点である。出土地点は遺跡の北西から南東にかけて全体的に分布する。

- 1群：板状の石を使用し、上面あるいは上下両面に平坦な磨面を有し、周縁部に縁の無いまま板状のものである。平坦面は節理面を研磨してできたものと思われ、部分的に擦痕が残る。全て破損品であり、赤熱を受けて赤変したもの2点。石材はすべて輝石安山岩である。10点。
- 2群：扁平な円礫の上下両面に磨耗痕をもつくぼんだ面があり、周縁が膨隆縁をなす。石材は全て輝石安山岩である。2点
- 3群：円礫の上面に鉢状の大きな凹みがあり、凹みの底部には敲打痕が見られる。輝石安山岩1点、硬砂岩1点である。

第25表 石皿等観察表

図版	出土地	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	高さ mm	重 量 g	石 材	分類	備 考	登録 No.
1	Ged21Ⅲ-2	(73)	(67)	37	(37)	(200)	輝石安山岩	1	上面磨耗痕	37
2	不 明	(156)	(125)	41	(41)	(990)	輝石安山岩	1	上面磨耗痕・火熱赤変	56
3	Ged30Ⅲ-3	(171)	(155)	35	(35)	(730)	輝石安山岩	1	上面磨耗痕	39
4	Fij27Ⅲ	(68)	(52)	21	(21)	(100)	輝石安山岩	1	上下面磨耗痕	35
5	Gab301	(98)	49	21	21	(200)	輝石安山岩	1	上下面・両側磨耗痕	36
6	le59Ⅲ	(132)	(98)	24	(24)	(285)	輝石安山岩	1	上下面磨耗痕・上面火熱赤変	43
7	Fi30	(156)	(94)	19	(28)	(410)	輝石安山岩	1	上下面磨耗痕	34
8	lbed トレンチ	(170)	(79)	28	28	(740)	輝石安山岩	1	上下面・上端磨耗痕	42
9	Db62	(222)	(163)	32	32	(2,500)	輝石安山岩	1	上下面磨耗痕・側面敲打痕	33
10	Gef27Ⅲ-3	280	180	32	32	(3,800)	輝石安山岩	1	上下面磨耗痕・側面敲打痕	40
11	He6Ⅱ(2)	180	124	26	43	1,342	輝石安山岩	2	上下面磨耗痕	41
12	Ged21Ⅲ-3	(252)	176	46	76	(3,700)	輝石安山岩	2	上下面磨耗痕	38
13	Ha31	92	85	33	54	450	輝石安山岩	3	上面底部敲打痕	31
14	He6	169	128	56	72	2,170	硬砂岩	3	上面底部敲打痕	32

その他礫石器

① 両刃石器 (第82図1~2 図版38の1~2)

偏平縦長の自然礫の一部に両面からの加撃が加えられて刃部をつくり出している。刃部は長軸に対して直交するものと平行するものがある。

第26表 両刃石器観察表

図版	出土地	長さ mm	幅 mm	長軸指数	厚さ mm	重量 g	石 材	刃 部	登録No
1	G27Ⅱ-2	178	88	202	26	790	淡緑色凝灰岩	長軸直交	13
2	Gb21Ⅰ	198	86	230	23	513	粘板岩ホルンフェルス	長軸平行	14

② 研磨溝のある礫 (第82図3 図版38の3)

偏平で菱形状の礫の上下両面に研磨溝があり、1点出土。上面は長軸を中心に左右対称状に8条の溝がある。下面は十字状に2条の溝がある。溝の幅4mm、深さ1mm前後である。溝の底は狭小で直線状をしており、断面形はV字状である。先端の細いもので擦った結果できた研磨溝と思われる。全面がかなり風化している。

第27表 研磨溝ある礫観察表

図版	出土地	長 軸 mm	短 軸 mm	長 軸 指 数	厚 さ mm	重 量 g	石 材	備 考	登録No
3	Fij27Ⅱ	94	80	117	27	194	輝石安山岩	器面風化	45

石製装身具

① 塊状耳飾 (第82図4 図版38の4)

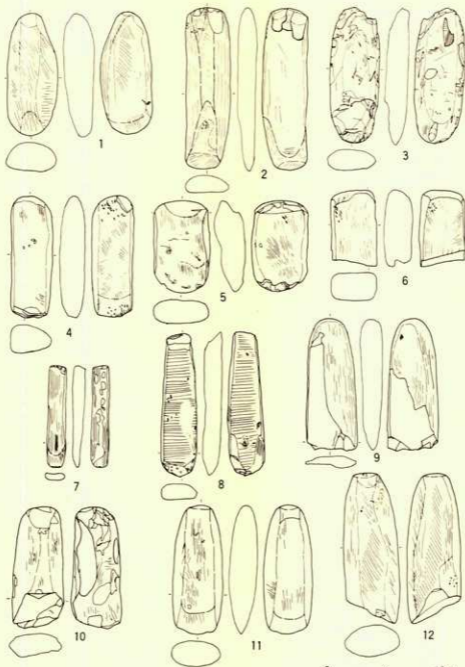
薄い板状の長方形で、上に寄った部分に両側から穿孔され、孔から下迄切れ目をもち、上辺寄りの側面に刻みがつけられている。長軸に平行した擦痕が残り、全面入念に研磨されている。片側半分を欠損している。1点

② 有孔石製品 (第82図5 図版38の5)

厚手で円形をなし、中央に両側から穿孔された単孔がある。上・下両面は平坦な磨面で、周縁は丸味のある磨面となっている。1点出土

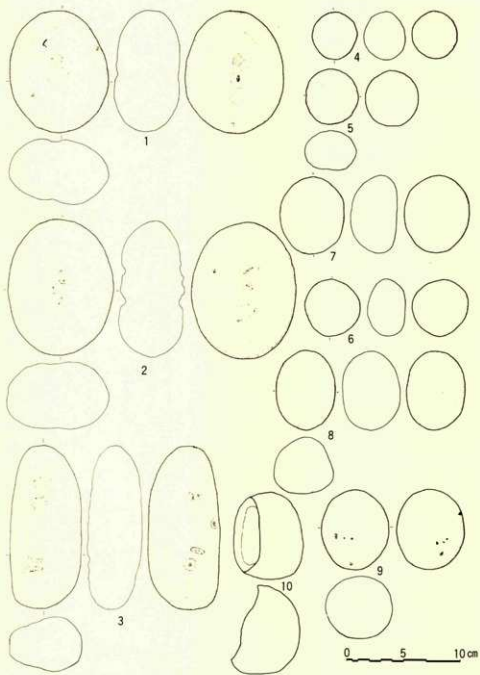
第28表 石製装身具観察表

図版	出土地	長 軸 mm	短 軸 mm	厚 さ mm	孔 径 mm	重 量 g	石 材	備 考	登録 No
4	Hf12Ⅱ	68	(14)	5	大(5.5) 小(3.3)	(9.2)	粘板岩	塊状耳飾、半分欠損	46
5	Ie59	58	53	22	大22 小12	52	複輝石安山岩	有孔石製品	44



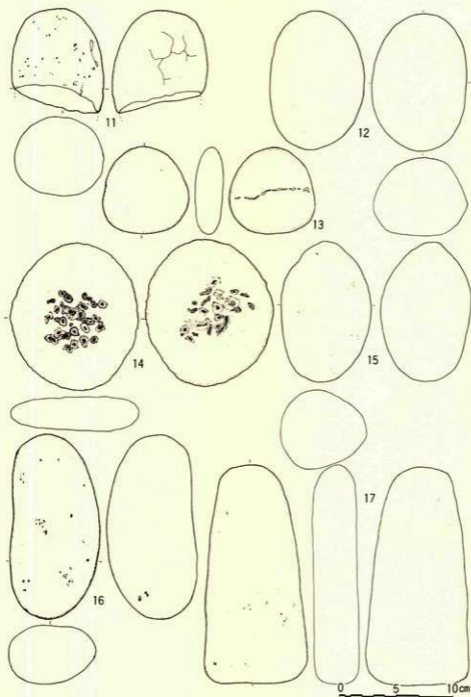
1-3 (Ⅰa類) 4, 5 (Ⅰd類) 6-8 (Ⅰc類)
 9 (Ⅱc類) 10-12 (Ⅱd類)

第77図 磨製石斧

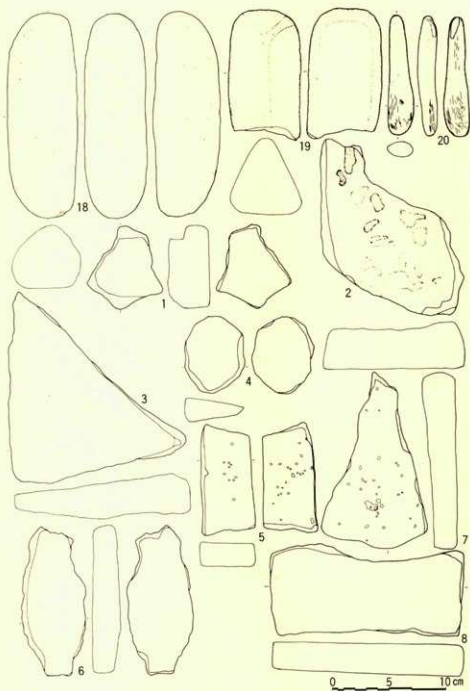


1~3 (凹石) 4~10 (磨石)

第78図 凹石・磨石

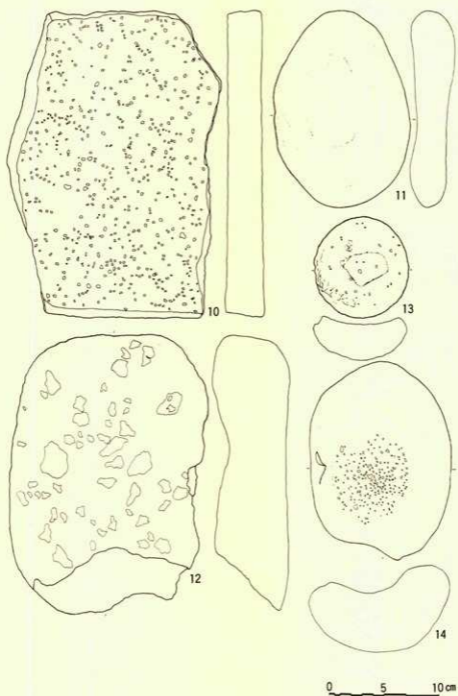


第79図 磨石

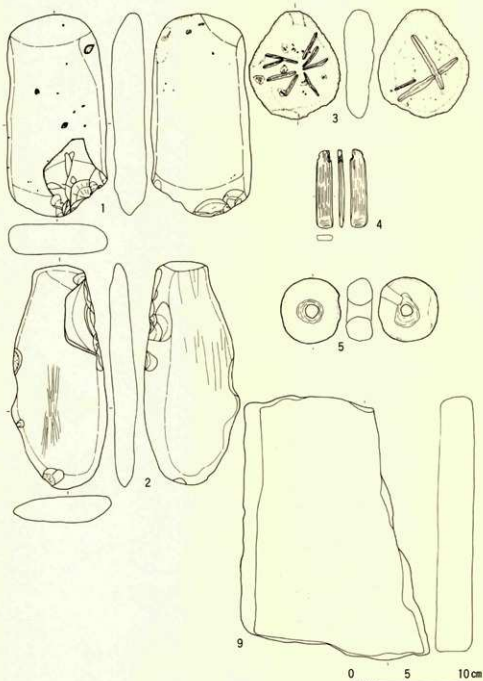


18~20 (磨石) 1~8 (石皿)

第80図 磨石・石皿



第81図 石皿等

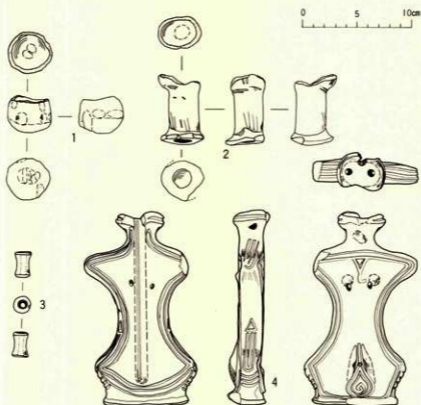


1～2 (両刃石器) 3 (研磨溝ある礫) 4 (塊状耳飾) 5 (有孔石製品) 9 (石皿)

第82図 石皿他

(3) 土製品 (第83図 図版39)

土偶完形品1、土偶の足部分1、小形手づくね土器1、耳栓1である。いずれも落ち込み遺構（遺物包含地）からの出土である。図4（写真1）の土偶は、第2群土器とともに出土した。右手部分が欠けている。高さ17.5cm、体部の厚さ2.2cmである。頭部左右に貫通孔があり、紐等の擦痕が残っている。又、後頭部の貫通孔は、体部裏面の浅い溝に続いており、棒を通して立てたと思われる。乳房部分にも貫通孔がある。体部の文様は平行な沈線でふちどられ、側面には、三角形文、平行沈線、弧状文が施されている。色調は褐色であるが、体部右半分が黒変しており、胎土も密で固くしまっている。施文法から第2群2類土器群との関連が考えられる。図2は、土偶の足とみられる。残高6cm、足下に円形のくぼみがある。色調は褐色で胎土も密である。図1は、手づくね土器で、指頭圧痕の痕跡が明瞭であり、色調は褐色。図3は耳栓であり、最大胴径1.4cm、最小胴径1.0cm、貫通孔の直径は約5mmであり、色調は褐色、胎土は石英粒を含みもろい。



第83図 土製品 (1/5)

古代～歴史時代の遺物

(1) 土師器 須恵器 (第84図 図版40)

本遺跡の土師器、須恵器の分布状況はほぼ全域にわたるが、各遺構出土のものを含めて総破片数 175 点である。そのうち遺構に伴わない破片数は 48 点で、いずれも第 I 層、第 II 層中からである。出土破片の分類毎の特徴は、下記のように観察される。

内黒杯：内面はヘラミガキ後黒色処理が施され、底部は糸切り後無調整のものと回転ヘラ削り調整のあるものがみられる。

器形の判明するのは 1 個体しかないが、他の破片等から、底部から体部にかけて内彎ぎみに立ち上がり、口縁がわずかに外反又は内彎ぎみの器形と思われる。

非内黒土師質杯：内面外面とも再調整の痕跡がなく、成形の際のロクロ痕のみで凹凸がある。比較的軟質のものと硬質のものがある。口縁部がわずかに外反又は内彎するものと直上形にのびる器形である。

須恵器杯：灰色硬質の杯で、ロクロ痕が明瞭である。糸切り後無調整のものと底部側面をヘラ削りしたものがみられ、器形は非内黒土師質杯とほぼ同じである。

高台杯：内黒と非内黒土師質のものがあり、ロクロ痕がみられる。

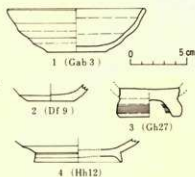
土師器甕：ロクロを使用しないものは、ヘラ削り、刷け目、横ナデを施し、口縁が短かく強く外反する長胴の器形であり、ロクロ使用のものは、糸切り後無調整で、口縁の外反する長胴の器形である。

須恵器壺：器形の判明するものは 1 点もなく、短頸の壺の頸部及び、壺又は甕の体部破片ばかりである。ロクロ痕のみのもやロクロ調整後ヘラ削りを施したもの、たたき目をもったもの等である。底部は不明である。

第84図1の杯は欠損部のない完形品である。口径 12.4cm、浅黄橙色の非内黒土師質土器で

第29表 遺構に伴わない土師・須恵器出土数

分類 地点	内黒杯		土師質杯		須恵杯		土師甕		須恵甕		高台付杯		計		
	口	体底	口	体底	口	体底	口	体底	口	体底	口	体底			
C 区					1				1	1			3		
D 区	1				1	1		4	3			1	11		
Fij56 付近	1		1		1	1			1	2			7		
Fj3・Gab3	1	2	3	5	1			2					14		
Gghijグレット		1						1	1	1			4		
不明	3	1	1					1		3			9		
計	3	5	2	4	6	3	1	2	0	8	3	3	7	1	48



第84図 土師器 (1/4)

胎土に石英粒を含む。糸切り後無調整でロクロ痕を残し、底部から内彎ぎみに立ち上がり、口縁がわずかに外傾する器形である。図3は高台杯の底部で、にぶい褐色を呈する非内黒土師質土器で胎土が密である。器形は不明、高台径5.8cmある。図4は内黒の高台杯底部で外面はにぶい橙色、高台径7.8cm、糸切り後台部をとりつけ横ナデ調整している。図2は底径5cmの内黒杯で糸切り後無調整、胎土は密で硬質である。

破片資料がほとんどであり、器種、器形の特徴を確定できないが、杯の器形、調整技法のあり方から、10世紀～平安時代と推定される。

(2) 木材 木製品 (第85図～第87図 図版43)

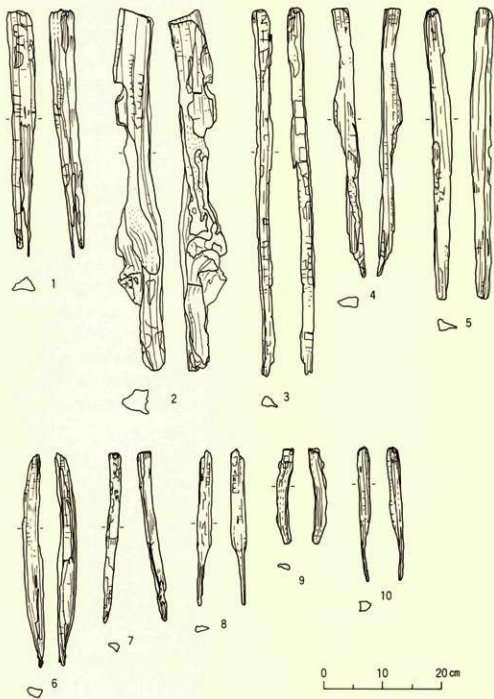
柱根7点、杭、板合わせて21点、漆器碗1点のほか、桃の種子10点があり、柱根を除いてはいずれもDe56 池跡及び以南に出土するものである。

CJ12建物柱穴に伴う6点の柱根はすべて栗材で、上部を腐蝕しているが、底部木口面に加工痕を残し、樹皮の有しない円柱である。北西隅柱の場合、底部木口径26.7cm×23.6cm、残有高23.0cmでやや腐蝕している。底部木口の加工痕は中心部に対して3方向より順次50数回に及ぶ打撃をうけてほぼ平面をなす。刃幅は0.8cm前後で弧状を呈する。根元は半円にのみ3面の切削を有し、木口と同様の刃痕を残している。削り目は木口より長く、3.7cm前後を計る。3面は共に木口切断に先行し、刃痕は繊維方向に斜めに入ってやや不規則に並列している。

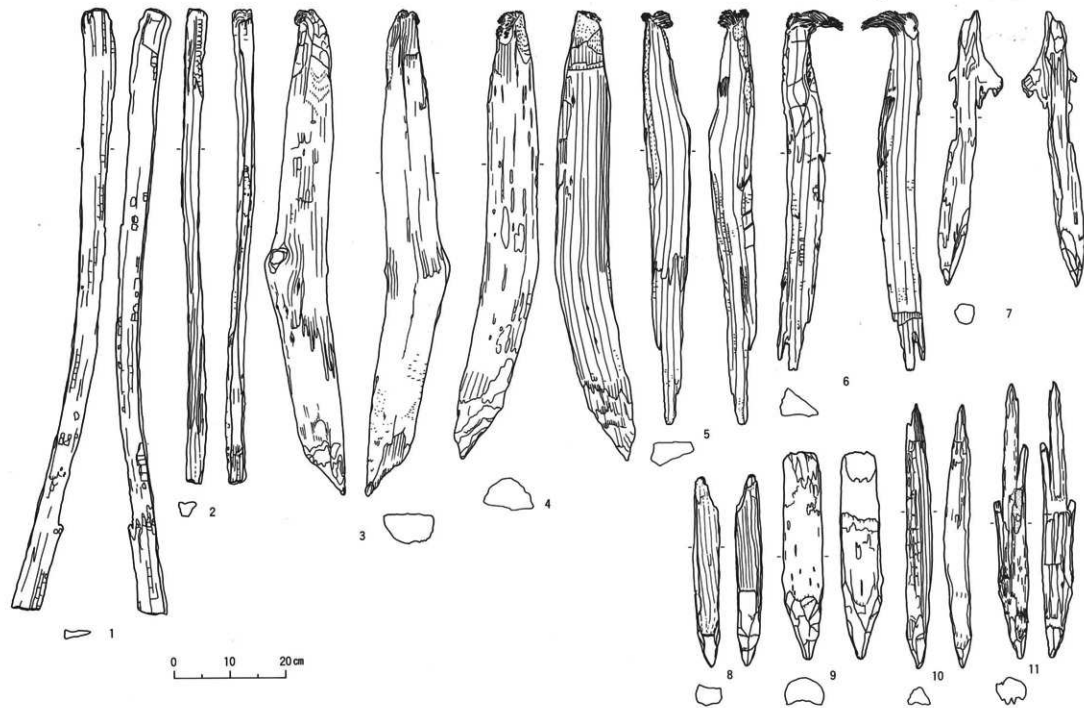
CJ12建物の柱痕はすべて共通する刃痕を残し、刃先が曲面をなす蛤状で、刃幅2寸7分の手斧等による加工痕と推定される。また、根元部分に見られる切削は上部に及ばず、全く加工されない円柱を残すことから柱脚整形による加工も推定される。



第85図 柱根実測図



第86図 木材実測図(1)



第87圖 木材実測圖(2)

Cj59柱列ではP106に腐蝕した状態で栗材が出土しているが、底部木口面が平面をなす以外加工痕は明らかでない。その他Cj9建物柱穴、Ca59柱列に若干の木片が認められるが、保存状態が著しく悪化して採集されていない。

De56池跡の木杭は丸太杭と割材を利用し、共に先端部を粗雑に削り出している。頭部を腐蝕によって失っているが、現存最大長68.8cm、径8.0cmを計る。尖先部は打ち込みによる反返りが見られる。割材の大部分は栗であるが、丸太杭には朴・檜・桜等が含まれ、樹皮を残すものも認められる。板材は厚さ2cm前後で腐蝕折損が進んで小片が多く、用材には栗・杉が含まれている。

漆器碗は黒漆の皮膜を僅かに残しているが、大部分を焼失して全体は明らかでない。

第30表 柱根その他

番号	実測図	図版	出土地点	遺構	品名	加工	長さ	幅	厚さ	樹種	備考
1	1		C i 56	P 42	柱根	底部	25.2cm	18.8cm	28.2cm	栗	
2	2	3-2	C j 6	P 29	"	"	21.0	20.0	42.0	"	A. E. 保存処理
3			C j 12	P 26	"	"	9.0	4.2	14.7	"	
4			Da 59	P108	"	"	17.7	15.8	31.8	"	
5			Da 56	P 92	"	側面底部	26.7	23.6	23.0	"	
6	3	3-1	D b 50	P 74	"	底部	31.0	30.0	46.0	"	A. E. 保存処理
7			D b 6	P 66	木片	"				"	
8	2-10	2-5	D c 56	池跡	"	"	37.5	3.7	2.4	"	
9	2-8	2-4	"	"	"	"	27.2	3.1	2.9	"	
10	2-11	2-11	"	"	"	"	39.1	4.3	3.9	"	
11	2-7	2-10	"	"	"	"	38.7	2.7	2.8	"	
12	2-9	2-8	"	"	"	"	29.5	5.6	3.8	朴	
13			"	"	丸杭	"	60.0	2.7	3.0	松	
14			"	"	"	"	65.0	4.5	4.0	"	
15			"	"	"	4面削	26.0	4.0	4.0	"	
16			"	"	"	"	33.0	3.5	3.5	朴	
17			"	"	板	"	29.5	3.6	0.6	松	
18			"	"	木片	"	15.0	35.0	1.0	"	
19			"	"	"	"	24.0	4.5	1.0	"	
20			"	"	丸杭	"	35.0	0.3	0.2	小楠	
21	2-1	2-1	"	"	板	"	86.5	3.7	1.3	栗	
22	2-2	2-2	"	"	杖状	"	67.5	2.4	2.0	"	
23	2-3	2-6	"	"	割	杖	68.8	8.0	4.9	"	
24	2-4	2-3	"	"	"	"	63.8	7.2	4.4	"	
25	2-5	2-9	"	"	"	"	58.3	6.3	3.4	"	
26	2-6	2-7	"	"	"	"	51.2	5.3	3.9	"	
27	1-1	1-3	"	"	杖状	割	33.8	3.1	1.7	"	
28	1-2	1-1	"	"	"	"	48.9	3.4	3.2	"	
29	1-3	1-2	"	"	"	"	49.6	2.1	1.4	"	
30	1-4	1-5	"	"	"	"	36.2	2.7	1.4	"	
31	1-5	1-10	"	"	杭	"	39.1	2.4	1.4	"	
32	1-6	1-7	"	"	割	木片	23.4	2.6	1.3	"	
33	1-7	1-8	"	"	木片	"	23.0	1.4	1.1	"	
34	1-8	1-9	"	"	"	"	21.1	1.9	0.8	松	
35	1-9	1-6	"	"	"	"	12.6	1.6	0.8	"	
36	1-10	1-4	"	"	"	"	17.8	1.6	1.3	"	
37			D f 53	P 243	丸杭	5面削	8.8	7.5	29.0	栗	
38			D g 53	P 275	割	杖	10.4	9.0	32.0	"	
39			D c 56	池跡	漆器碗	"				"	焼失 A. E. 保存処理

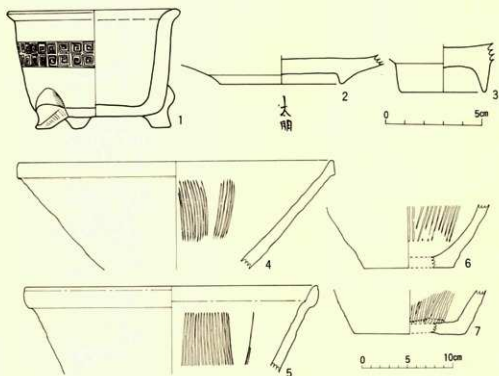
(3) 陶磁器 (第88図 図版41)

北半部では摺鉢を除く陶磁器は第Ⅰ層より31点、第Ⅱ層より11点出土するが、共に小片で復元できるものはない。日常雑器が多く、碗、皿、鉢、水注、徳利、坏、甕、壺等が判明する。図示する皿は「太明」銘を有し、内面には波打ちとみられる波状文様の染付であるが全体は不明である。底径6.1cmである。伊万里産とみられる。その他唐津焼の碗の小片が含まれる。

De 56 池跡出土の陶磁器は、内外黒色の甕片2、黄緑色の唐津焼とみられる碗片、外面緑色の花器、または水注の破片である。

摺鉢片は接合する2点を含む18点である。内外共に赤褐色を呈する条痕を有する摺鉢で、胎土は砂粒を含む粗雑な赤褐色や淡褐色を呈するものから硬質の緻密な灰黒色のものと多様である。条痕は見込全面施条と部分的に施条するものがあり、条痕数、条痕幅共に一律でない。De 56 池跡、Df 59石敷遺構出土のそれは第Ⅰ・Ⅱ層出土片に類似し、陶磁器と同様近世以降のものともみられる。

南半部では、摺鉢を除く陶磁器は総計22点である。そのうち磁器1点である。主にH、Iブロックに集中して出土しているが、ビット群、土壌群とは離れた地点のⅠ層、Ⅱ層中にある。



第88図 陶磁器実測図 (1~3は $\frac{1}{2}$ 、4~7は $\frac{1}{4}$)

FGブロック、Jブロックにはほとんど出土しないが、前述の落ち込み遺構（遺物包含地）からは、第88図1（図版6、図版41の24）の三脚陶器が出土している。美濃焼とみられる土器片（図版41の20）も1点含まれている。細片が大部分で、器種は碗や皿が多い。摺鉢は3点のみで、いずれも細片である。住居跡や溝状遺構に伴う陶磁器は1片もみられない。

第31表 主要陶磁器観察表 摺鉢観察表

番号	実測図	図版	出土地点	層位	器形	部位	口径	底径	器厚	外輪調	内輪調	胎土	備考	
1		1	Ch53	I	碗	口縁	8.0cm	cm	0.4cm	白	青	白	白	色色
2		2	Cd3	I	碗	口縁	9.0		0.4	白	青	白	青	色色
3		10	Cd	I	碗	底		4.0	0.4	青	灰	灰	灰	色色
4		3	Cd	I	鉢	口縁	31.0		0.5	白		灰	白	色色
5		11	Cd	I	碗	底		3.4	0.4	白	青	白	青	白
6	3	14	Da62	I	碗	底		4.6	0.7			白	白	黄色色
7		4	Dc50	I	鉢	口縁	1.0		0.2	暗	緑	白	白	灰白色
8		9	Dc59	II	小	底		2.4	0.4	白		白	白	灰白色
9		6	Dc56	池跡	蓋	底	20.0~		1.1	暗	黄	暗	暗	褐赤褐色
10		12	Dc56	池跡	鉢	底	8.0		0.6	暗	赤	暗	暗	灰白色
11	2	8	Dc15	I	皿	底	6.3		0.7	灰	青	灰	白	色色
12		7	Dd59	池跡	鉢	口縁	23.0			灰	青	白	青	赤褐色
13		15	De59	I	底			4.8	0.7	灰	青	灰	灰	色色
14		5	De12	I	猪	口	8.0		0.4	暗	青	暗	白	色色
15		13	Dg53	I	皿	底		9.0	0.4	暗	黄	暗	白	赤褐色
16		16	Ha50	I	鉢	口縁	5.5		0.5	浅	緑	緑	暗	褐色
17		17	If62	II	碗	口縁			0.4	浅	緑	灰	灰	色色
18		18	Ie62	I	壺	口縁			0.5	青	灰	灰	灰	色色
19		19	Hh12	III	碗	口縁			0.6	灰	黄	灰	黄	褐色
20		20	Ib50	II	碗	底			0.6	浅	青	緑	灰	褐色
21		21	If62	II	皿	底			0.5	灰	色	灰	灰	色色
22		22	Fij56	I	皿	底		2.5	0.6	灰	色	灰	灰	色色
23		23	Ia53	I	碗	底		3.0	0.7	青		灰	灰	色色
24	1	24	Gf30	II	香	復元可	9.0		6.8	黒	(褐)	黒	(褐)	褐色

摺鉢

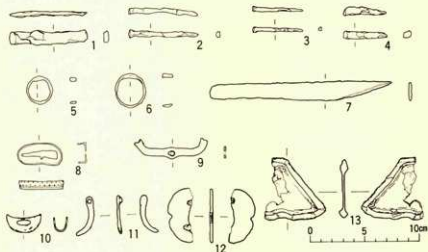
番号	実測図	図版	出土地点	層位	口径	底径	施条	条数	単位幅	条幅	色調	胎土	備考
1	4	6	Da62	II	10.1	10.1	全	5	1.96	0.14	暗褐色	暗赤褐色	
2		4	Da62	II			全	5~	1.90	0.20	暗赤褐色	暗赤褐色	
3	2	2	Da62	II	32.3		部	17	4.60	0.15	赤褐色	淡褐色	
4	3	8	Dc62	I		12.0	全	6?	1.35	0.15	暗赤褐色	暗褐色	
5		3	Dc62	I			全	8~	2.40	0.15	暗赤褐色	灰黒色	
6		7	Dc56	Ic			全	10	2.20	0.15	暗赤褐色	赤褐色	
7	1	1	Dc15	I	34.2		部	11	2.20	0.10	淡赤褐色	淡褐色	
8		5	Dg56	石敷			全	8	1.65	0.10	暗褐色	灰黒色	
9		9	Ia53	I			全	5~	0.15	0.15	暗赤褐色	灰褐色	
10		10	Ia50	II			全	5	1.20	0.15	赤褐色	赤褐色	

(4) 金属製品 (第89図 図版42)

北半部から鉄製品33点、銅製品2点である。共に第I・II層出土で、用途の判明しないものが多い。鉄製品では釘8点、締め金具2点、小刀1点のほか、鍋等が含まれるが、破損して明らかでない。

銅製品は把手と縁金物とみられる1点がある。後者は中央部を腐蝕しているが、側面に規則的に配される小突起を配する装飾が認められる。

南半部からは鉄製品33点、銅製品4点である。鉄さび、釘、鍋の他小刀と思われるもの2点などである。銅製品では、半分欠損の鐙、とめ金具、鞘尻か柄頭ではないかと考えられるもの寺院で使用の打楽器「磬」の破片と、それぞれ1点ずつである。遺構には伴っていない。



第89図 鉄製品・銅製品実測図 (1/5)

第32表 鉄製品

番号	実測図	図版	出土地点	層位	名称	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1		13	B j 3	Ⅱ	板状丸	4.7cm	2.9cm	0.2cm	9.9	
2	2	8	C h 6	Ⅱ	釘	6.3	0.6	0.6	4.7	
3		5	C j 59	Ⅱ	釘	2.1	1.3	0.7	8.3	
4		11	C j 3	Ⅰ	角釘	2.8	0.5	0.5	2.2	折損
5	6	18	C j 6	Ⅱ	鍔金	2.7	2.5	0.2	3.2	
6		15	C j 9	Ⅰ	板状	3.1	2.2	0.1	3.6	
7		3	D a 56	Ⅱ	板状	11.5	0.9	0.5	30.8	
8		4	D a b 53	Ⅱ	板	6.9	2.2	0.3	14.1	
9		16	D a 9	Ⅰ	鍋	9.5	4.4	0.2	32.8	
10		12	D b 56	Ⅰ	鍋	3.6	3.0	0.3	12.5	
11	3	9	D b 53	Ⅱ	角釘	4.6	0.3	0.3	1.5	破損
12	4	10	D c 59	Ⅱ	角釘	4.0	0.6	0.6	4.3	折損
13	5	17	D e d 59	Ⅱ	鍔金	3.0	2.7	0.2	9.9	
14		2	D e f 9	Ⅰ	板状	14.2	0.7	0.4	24.0	
15		7	D e f 9	Ⅰ	板状	7.7	0.9	0.1	8.6	折返し
16	7	1	D f 12	Ⅱ	小刀	16.7	1.8	0.2	18.6	
17		14	D g h 56	Ⅱ	板状	3.7	2.2	0.2	8.5	
18	1	6	D h 6	Ⅰ	板状	9.3	1.0	0.3	9.7	
19		19	H g 3	Ⅲ	角角釘	3.5	0.4	0.5	3.0	
20		20	H i 56	Ⅰ	角角釘	3.4	0.7	0.6	5.5	
21		21	I e 53	Ⅰ	角角釘	5.5	0.3	0.3	2.4	
22		22	I b 56	Ⅰ	角角釘	4.2	0.5	0.6	5.5	
23		不明	不明	表採	板状	8.2	1.7	0.4	28.5	
24		24	G h 3	Ⅱ	板状	4.8	2.1	0.6	8.9	
25		25	G h 53	Ⅰ	板状	3.5	1.9	0.5	5.5	
26		26	H g 12	Ⅲ	鍋	4.2	5.1	0.5	48.0	
27		27	J f 52	不明	鍋底			0.3	127.5	底径8cm

第33表 銅製品

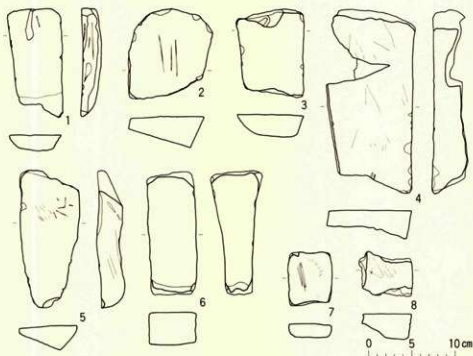
番号	実測図	図版	出土地点	層位	品名	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	9	28	Dc59	I	手	4.8cm	1.1cm	0.1cm	4.3g	
2	8	29	Dc53	II	鋳金物	4.1	2.1	0.1	9.0	
3	10	30	Ia53	II	鋳金物	4.7	2.0	0.3	17.5	
4	11	31	Fij?	I	とめ金具?	3.6	0.6	0.3	3.9	
5	12	32	Ia53	II	磨粉石?				4.3	
6	13	33	H12	I				0.2(0.8)	46.0	残高5.5cm, 残巾5.4cm

(5) 石製品 (第90~91図 図版44)

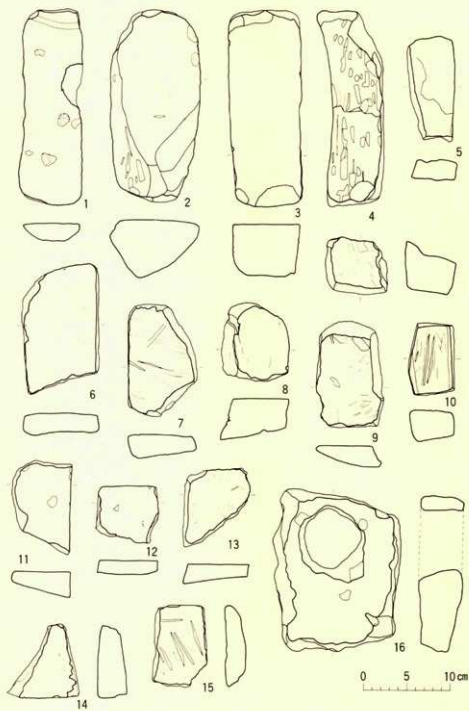
砥石27点、手洗鉢1点、用途不明の穿孔石2点である。砥石は第I層9点、第II層18点の出土でその大部分は長軸方向の一端を折損している。長方形をなすものが多く、断面は方形ないしは台形に近い不整形をなす。砥面は3~1面でいずれも長軸方向に使用され、部分的に鋭利な砥条痕を残すものが含まれている。石材は衣川周辺に産する凝灰岩、斜長石流紋岩である。

西辺の灌漑水路に出土する砥石が最も大きく、 $22.5 \times 8.3 \times 6.0$ cmを計り、上下2面を使用している。両側面には長さ1.6cm、幅0.4cm前後の切断痕が長軸方向に平行して走り、中央部を境に両端より切断したための段差と整形痕が認められる。

Cj9建物杭穴P89出土の砥石は不定形をなす斜長石流紋岩製である。砥面はよく磨耗し、中央部より更に先端に凹みを持ち、いずれも0.8cmの研磨幅を計る。下面は細線状の砥痕が残るほか、0.2~0.3cm幅の石切工具の条痕が認められる。



第90図 石製品実測図(1)



第91図 石製品実測図(2)

第34表 砥石

番号	実測図	図版	出土地点	遺構別位	長さ	幅	厚さ	重量	紙面	断面形	石材	備考
1	1	1	C j 56	I	12.1cm	6.0cm	2.0cm	205.9g	1	不整形	斜長石 流紋岩	
2	2	2	C j 53	"	10.0	8.9	3.4	391.8	3	不整形	"	
3	3	3	C j 53	"	10.1	6.5	2.6	299.3	2	不整形	"	
4	5	4	Da 56	P 89	15.9	6.8	2.8	308.6	1	不整形	"	
5		5	Da 53	I	"	"	"	"	1	方形	流紋岩質凝灰岩	
6	4	12	Da 15	"	19.9	9.8	3.2	783.0	3	台方形	斜長石 流紋岩	
7	6	6	"	"	14.1	5.5	3.8	670.0	2	台方形	砂岩	
8	12	7	D b 62	"	11.9	2.7	5.1	235.0	1	台方形	流紋岩質凝灰岩	
9	23	8	"	"	6.3	9.3	2.4	205.8	1	方形	斜長石 流紋岩	
10	13	9	"	"	7.1	6.1	5.9	323.4	2	方形	"	
11	18	10	"	"	8.3	5.2	3.6	288.4	4	方形	"	
12	17	11	"	"	12.2	7.6	2.4	304.3	2	"	"	
13	15	16	"	"	12.9	7.9	2.7	390.4	2	"	"	
14	14	17	"	"	14.8	8.8	2.5	560.0	2	"	"	
15	9	13	"	"	22.6	6.5	2.1	578.0	1	不整形	"	
16	16	18	"	"	8.8	7.8	4.8	438.7	2	不整形	"	
17	10	14	D b 15	"	22.1	10.0	6.7	1,920.0	1	不整形	流紋岩質凝灰岩	
18	8	"	D c 59	"	4.7	5.9	3.0	107.0	1	不整形	"	
19	19	"	D d 56	II	4.4	3.9	1.0	33.9	2	長方形	"	
20	22	20	"	"	8.4	8.4	3.4	271.6	2	長方形	"	
21		21	D c 15	I	"	"	"	"	2	"	"	
22		22	D d 15	"	"	"	"	"	1	"	"	
23	11	15	D e 15	"	22.5	8.4	6.0	244.0	2	台方形	"	
24	7	"	D f 56	"	6.3	5.1	1.6	79.5	1	台方形	"	
25	20	"	D g 12	II	6.6	7.0	1.7	126.5	1	台方形	粘板凝灰岩	
26	21	23	"	"	8.1	7.6	2.3	230.9	2	台方形	流紋岩質凝灰岩	
27	19	22	D h 9	I	10.4	6.7	3.0	291.5	2	"	"	

その他の石製品

1			C g h 3	I	3.7	4.5	1.1	21.7			流紋岩	
2	24	24	D b 12	II	17.9	14.6	5.0	749.9			熔結凝灰岩	
3		25	D c 56	池	36.2	15.2	6.3				凝灰岩	手洗鉢

(6) 古銭 (第92図 図版42)

寛永通宝5点、鉄銭1点、一銭銅貨1点である。寛永通宝の計測値は近似するが、1点が二次加熱をうけているとみられる。鉄銭は破損して明瞭でない。

第35表 古銭

番号	拓本図	図版	出土地点	別位	銭銘	外径外径	外径内径	内径内径	内径内径	外径厚	重さ	備考
1	1	34	C i 12	II	寛永通宝	23.20mm	7.10mm	19.70mm	6.10mm	0.80mm	2.2g	
2		35	Da 50	II	不明鉄銭							破片
3	2	36	Da 9	I	寛永通宝	22.46	7.95	19.05	6.10	1.13	2.5	
4	3	37	D d 9	II	寛永通宝	24.40	6.75	19.90	6.10	1.10	2.6	
5		40	Z 7	I	鉄銭	27.80		26.40		1.40	6.7	明治9年購
6		38	J i 95	不明	寛永通宝	24.40		7.10	19.90	5.7	1.30	3.1
7		39	H c 6	I	寛永通宝	24.20	7.10	19.80	5.6	1.40	2.9	



1



2



3

第92図 古銭拓本 (片)

IV まとめ

本遺跡の調査区域にあたる段丘は、奥六郡を支配した安倍氏の衣川の城柵があった地域に含まれており、衣川をはさんで東に琵琶柵、西に月山神社山麓をひかえ、北館、南館、小松柵等の館や柵、大手門などがあつた地域として知られている。遺跡名の「北館」はそれによるものであるが、調査区域は「北館」と「南館」と伝えられる両地域にまたがっていると考えられる。「伝大手門遺跡」としたのは、ブロック名でJ区以南の場所である。今回の調査では、金属製品や土師器、須恵器など遺物のみで、それら平安時代の館^(注1)或いは柵に関連する遺構は検出されなかった。

1 南半部(F~J区)について

第1号住居跡は、所属時期を決定するに足る遺物の伴出はなかったが、明瞭なピットをもつこと、地床炉の形跡、同溝がある等の構造的な面から、縄文中期のものととらえた。全く同形の住居跡は、西田遺跡(紫波町)などにみることができる。

第2号住居跡は、増改築ともみられる部分を含め長方形である。覆土中の遺物は縄文中期(大木8式)の破片と土師器、須恵器が混在しており、重複の可能性もあるが、ピット、同溝、壁面などの観察からは明瞭でない。土師器、須恵器、土鍾等が住居跡内や周辺に集中して出土する事実から、平安時代には居住していたと考えられる。

土壌群やピット群、石組遺構は、単的にいって性格は不明であるが、時期的には周辺又は内部に堆積する土器片から、縄文中期に位置づけられるものであろう。

落ち込み遺構(遺物包含地)の形状は既述の通りであるが、同じ様な形成過程を経た遺構が、本遺跡の北方にあたる東裏遺跡にもみられる。落ち込んだ場所への土器廃棄が主な要因とみられる。流水や流れ込み等によって攪乱があつたことは推察されるが、復元可能なものを含め多量の土器数であり、縄文中期の土器編年上のような位置を占めるか、分類検討してみた。

分類された土器群が編年上正しく位置づけられたか否かという点では、少なからず疑問が残った。基本的な編年形式の特徴は、参考文献により把握したが、大木7a式期~大木8a式期に関する、量的に豊富な出土をみた報告書類で参照できたのは、天神ヶ丘遺跡(大迫町)、大陽台具塚(陸前高田市)、大館遺跡(盛岡市)、繁遺跡(盛岡市)、長者原貝塚(宮城県南方町)、高谷野原遺跡(金ヶ崎町)、長根貝塚(宮城県蒲谷町)である。

大木7aと7b、7bと8a、8aと8bとそれぞれ連続として続くものであり、その境界に一線を引くことは難しいことである。本遺跡の場合についてもそうである。個々をとりあげて器形文様を観察すると、千差万別であり、どれひとつとして同じものがない。

土器編年上の位置づけで戸惑った点は、次の諸点である。

○第1群3類土器は、大木7aか7bか。もしくは前期に含まれるものか。

○第2群1類a、b、2類a、bの中には、大木7aに含まれるものがないかどうか。又、第2群1類dや第2群2類d及び第2群3類には、大木8aに入るものがありそうである。

○第3群（大木8a）と第4群（大木8b）との区別も、模範的な大木8bのまとまった出土がなかったもので、判然としなかった。

本遺跡の分類では、層位的な裏づけと器形に関する吟味が、充分でできなかった。土器編年について、大木7a～8bに到る詳細な研究と公表が、今後大いに望まれる。

次に石器についてであるが、素材として使用された石材は21種類に及ぶ。石器の種類による選択性がみられる。剥片石器では11種類の石材が使用されているが、珪質凝灰質泥岩、珪質細粒凝灰岩、珪質泥岩、黒曜石等が多く使用されている。磨製石斧では3種類の石材使用であるが、粘板岩が最も多い。礫石器では8種類の石材が使用されているが、輝石安山岩が大部分である。石製装身具の石材は粘板岩である。剥片石器、磨製石斧、礫石器は夫々使用石材が異なっている。種々の石器の形態は、縄文中期に伴出する一般的なものである。

2 北半部（A～E区）について

検出される遺構は近世における民家とその付属施設の一部と解され、屋敷地は大凡南北の遺構分布域と見られる。主屋とその付属建物はいずれも掘立柱建物であり、当地方における掘立柱建物から礎石建への移行時期が明らかになるならば更に特定の時期を与えることが可能である。

掘立柱建物の民家調査例は明らかでないが、東磐井郡東山町の長根屋敷では宝永年間（1704～1710）以前は掘立柱建物であり、宝暦13年（1763）の「遠野古事記」によれば遠野城下の下級武士の屋敷は殆ど掘立柱建物であることが知られている。しかし近世後半においても尚掘立柱建物が残存する例があって、地域的・階層的に著しい相異が認められ、特定できる資料にはなり得ていないと言える。

柱間寸法についてみるならば北上川東岸の調査例に、元禄8年（1695）の旧後藤家、享保13年（1728）の旧菅野家があり、ともに6.4尺を基準間としている。また、宮城県栗原郡における江戸中期の民家では6.4～6.45尺が分布し、山間部における間延び傾向が指摘されており、岩手県南に近い秋田県雄勝郡では6.5尺が認められている。北館における主要建物の造営柱間寸法は6.5尺であり、誤差を斟酌しても6.4尺以上の柱間基準とみられ、共通する基準間として扱えられるが、時期的・地域的な変化が大きく、厳密な古民家編年の指標とするには尚難点を有するものとみられる。

仙台藩における民家は17世紀後半より18世紀にかけてすでに完成された形式をもつといわれ、主屋は上屋に半間の下屋をおろし、又首組梁間は3間が最も多い。宝暦5年（1775年）の「百姓共地決分御式目」等による規制が知られるものの前後してどのような変遷があったかは明らかでない。

かでないが、検出された主屋がいずれも3.5間間梁間であり、この時期に共通する構造を有するものではある。

出土遺物については柱根を除いて陶磁器が最も多く、判明するものは近世後半以降に位置付けられるものが多い。しかし、主要な遺構に相伴する遺物を特定することができず、礎石建移行以後においても継続的に占地され、戦後の整地事業に符合するものである。遺跡南の調査区域では近世初期の美濃の灰釉皿片が出土しており、陶磁器を含む遺物については周辺の資料を得て更に検討を要する点である。特に近世の陶磁器については民家の調査と相俟って資料の集積が要請され、更に当地方における変遷の具体相が解明されるものと思われる。

注1) 「奥羽史談 第2巻」奥羽史談会編 続上代の胆沢平野二 及川儀右衛門

注2) 小倉強 「住居」 「宮城県史」19所収 宮城県史編纂委員会 (1956)

注3) 「南部叢書」第4巻所収 南部叢書刊行会 (1971)

注4) 新藤寅三他 「重要文化財旧後藤家住宅修理報告書」 江刺市教育委員会 (1967)

注5) 司東真雄 「岩手の民家(4) - 北上市口内町中村屋敷 -」 「奥羽史談」第34号所収
(1962)

注6) 佐藤巧他 「宮城県の古民家 - 宮城県民家緊急調査報告書 -」 宮城県教育委員会
(1974)

注7) 関口欣也 「秋田県の民家」 秋田県文化財調査報告書第27集 秋田県教育委員会
(1973)

注8) 伊藤延男他 「岩手県の民家 - 文化財建造物特別調査報告」 文化財保護委員会
(1965)

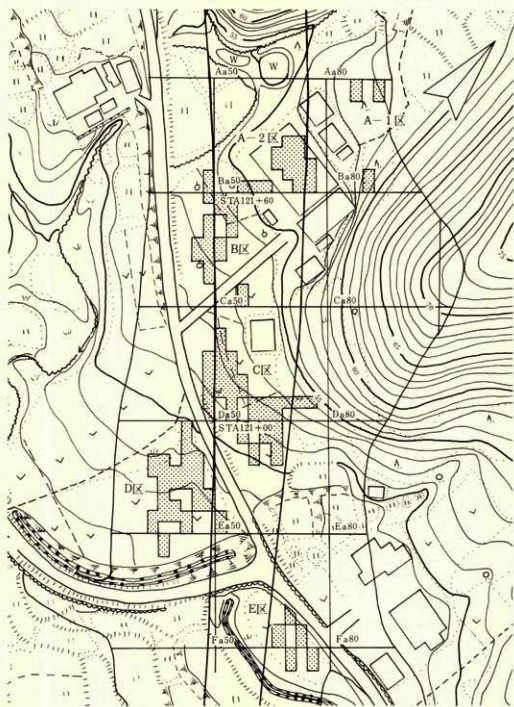
注9) 前掲(1)

衣川柵擬定地

本遺跡は北館遺跡の発掘調査の一部として調査された。したがってグリッド配置などは北館遺跡を参照されたい。用地内調査の関係から小成沢の低地部しか発掘出来なかったが、遺構・遺物は検出出来なかった。なお当遺跡の主体部をなす西方高位部は「衣川柵擬定地」としてではなく、「館城館」として登録・把握されている。何故本遺跡の名称がかくの如きものになったか不明である。

衣川関跡・衣関・衣川柵の擬定地については諸説があるが、未だ確定していない段階である。本事前調査の結果もその擬定に何ら資する所がなかった。

大沢遺跡



第1図 グリット配置図 (1/1000)

I 位置と立地及び基本層序（第1図・第2図）

大沢遺跡は西磐井郡平泉町大字大沢にあり、東北本線平泉駅の西方約1.5Kmに所在する。太田川の支流大沢によって形成された開析谷に位置し、沢に面した南斜面に立地する。調査地点の標高は47～60mで、現状は宅地、畑地及び水田である。調査地の層序は地目ごとに多少の差違が認められるが、基本的には次のようになる。

I 層 暗褐色腐植土 細粒からなり粘性はほとんどない。

II 層 黒褐色腐植土 中粒からなり若干粘性がある。

IIIa層 褐色凝灰岩風化土 細粒で粘性若干あり腐礫を含む。黒色土が混入する。

IIIb層 ぶい褐色凝灰岩風化土 中粒で砂質に富み粗い。大小の腐礫を含む。

IVa層 暗オリーブ色凝灰岩風化土 粘性が強く柔らかい。砂が混入する。

IVb層 オリーブ色凝灰岩風化土 粘性が強く柔らかい。中間に薄い褐色の砂質土が帯状にはいる。

V 層 灰褐色砂質土 細粒からなり石英、黒雲母等を含む。

I・II層は黒色系の腐植土でI層が耕作土、II層が遺物包含層である。III・IV層は黄褐色系の凝灰岩風化土で遺構検出及び確認面である。遺物包含層は丘陵急斜面では見られず、低地にのみ存在する。



第2図
基本層序

II 検出遺構

一 A-1区

A-1区は宅地の北東部にあたる山林で狭い平地をなす。6グリッド調査したが遺構は検出されなかった。発見された遺物は縄文土器2点と石器5点、木製品（碗）である。

二 A-2区

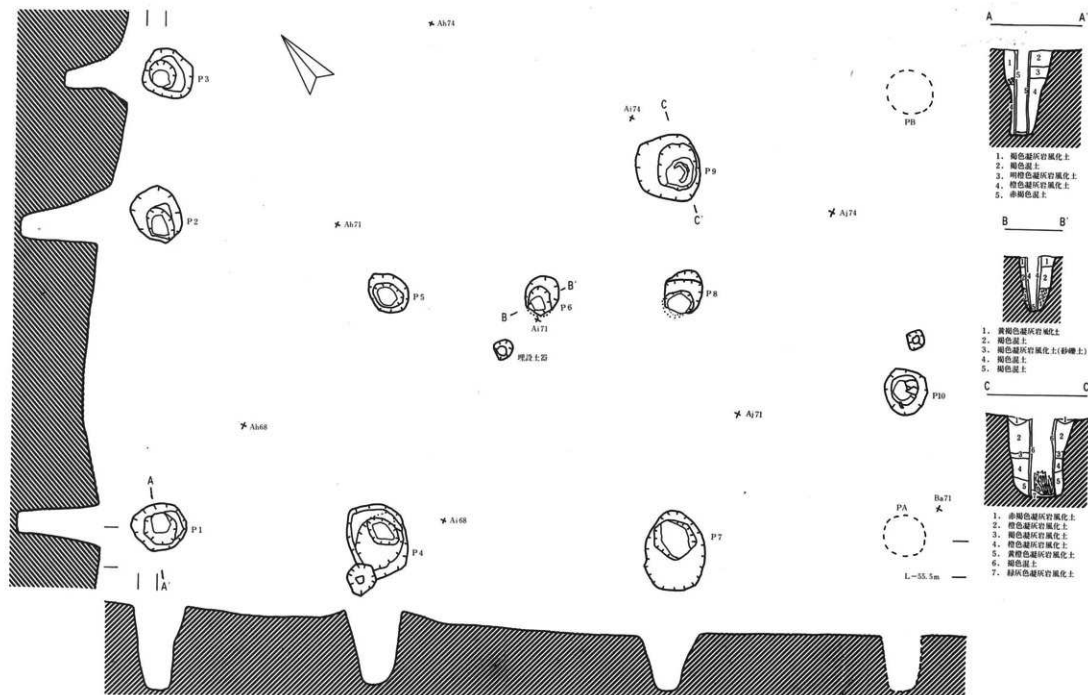
A-2区は千葉俊氏の宅地である。宅地は削平と盛土から構成され、整地層が2層確認された。上層は褐色土で、下層は黄褐色凝灰岩風化土と黒褐色土で前者が主体をなす。両層の間には焼土、木灰等が薄く層をなしている。当調査区では掘立柱建物跡、埋設土器、焼土遺構が検出され、縄文土器、石器と土師器、それに近世以降と思われる陶磁器等が発見された。

第1表 A-2区出土遺物一覧表

遺物 品数	土器	石器	土師器	銅器	鉄器	ガラス	金	銀	鉛	錫	その他
11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

掘立柱建物跡（第3図 図版1-2）

掘立柱建物跡は現存建物の下にあたる。検出された柱穴は10個で完全に1棟発見されたものではない。西妻の柱間は南から4.0m・2.0mで南側柱間は西から3.0m・4.0mである。南側柱列の北3.04mには3個(pit 5, 6, 7)の柱列があり間仕切柱列と考えられる。柱穴は盛土下位から検出されIII層で確認された。柱掘り方は直径40～60cmの円形で上半が若干開いている。



第3図 掘立柱建物跡 (1/6)

pit 1、2、4、7、10は直径50~60cmで、pit 9は80cmと特に大きい。深さは検出面から100cm前後である。これに対しpit 3、5、6、8は直径40~50cmで、深さが70cmと僅かに少ない。埋土は黄褐色粘土と黒色腐植土の混土で下位ほど黒色が強い。礫を含む場合もある。柱痕はすべて空洞になっており、その直径は20cm前後である。pit 9には柱根が残存しており、pit 7の底部には扁平な石が据えられていた。またpit 4の埋土上位にはウバガイ類似の貝殻破片と銅製品（第13図13）が含まれていた。

柱根は栗材を用いた丸柱で、腐植が著しく木質部の一部分を残すのみである。直径は26cmで残存の高さが34cmである。木口と側面の一部に加工痕を残す。木口はナタ様の工具で平に削られ前後に小さな段をなす。側面は木口から削られているようであるが、方向は一定していない。

埋設土器（第5図 図版1-4）

埋設土器はA h 68グリットのⅢ層上面から検出され、掘立柱建物跡のはほぼ中央にあたる。直径、深さとも30cmの土壌中央に直立状態に埋設していた。埋土はⅡ、Ⅲ層の混土で黒褐色を呈し、黄褐色土がブロック状に混入する。土器内に遺物等は見られず空洞であった。

埋設土器は褐釉陶器の壺で、縦に割れたものを接合して用いている。口縁部が幾分外反し、短い頸部を有す。八の字状に開いて肩部に続き、しだいに細くなりながら底部に至る。全体に褐釉が施されて黒褐色をなし、口縁部内側に及ぶ。器面には成形痕が残り釉が溜まって縞状に見える。体部下半は釉葉が剝落して灰白色を呈す。露胎は赤褐色で、器表面の一部に火脹れが観察される。底部は上底きみで、周縁部に器台剝離痕を残す。

焼土遺構

A j 62グリットのⅢ層から検出された直径10cmほどの小さな焼土で極めて薄い。近くには焼土を取り囲むように焼石3個が配されていた。付近からは縄文土器70点余が出土している。

三 B区

B区は宅地と村道間の畑地である。18グリット調査したが遺構は検出されず、発見された遺物は下表の通りである。

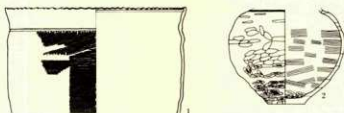


第4図 柱根実測図（約 $\frac{1}{4}$ ）



第5図
埋設土器実測図（約 $\frac{1}{4}$ ）

下位住居跡の平面形は $3.0 \times 2.5 \text{ m}$ の東西に長い不整形円形をなす。炉跡は検出されず、pit は東壁に接する外側で4個検出された。壁は図上復原したもので、ゆるく立ち上がるようである。その高さは20cmである。床面は平坦で床面下には掘り方が認められ黄褐色土で埋められていた。埋土は黒褐色炭化物層と明黄褐色遺物包含層からなり、後者の上面が上位住居跡の床面と推測される。出土遺物は床面直上とは限らないが住居跡に伴うものとして扱うことにした。



第7図 出土遺物実測図(約1/6)

竪穴住居跡から出土した遺物には甕、深鉢、壺、鉢あるいは浅鉢形土器等がある。器形の復原できるものは甕形土器と壺形土器の2点である。前者は最大部が肩部にあり頸部に僅かなくびれをもつ。口縁部が若干外反する。体部下半は徐々に薄減し底部へと続く。口唇部は指で押し付けて小波状口縁をなし、内側に1条の沈線がめぐる。表面の頸部下位にも1条の沈線がめぐり、口縁部無文帯と下半の地文部とを区画している。地文は単節斜縄文で全面間隙なく施文される。器壁は非常に薄く脆弱で器表面の剝落が著しい。後者は脹らみをもち最大部が残存部の3分の2の高さにあり、21.7cmを計測する。肩部に相当する部分に沈線がめぐり、それより上が欠損している。底部は上げ底ぎみの平底である。器表面は無文で巻き上げ痕を残す。丁寧に研磨され、色調は灰褐色である。

土壌(第8図 第6図参照)



第8図 土壌(約1/6)